

大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群

—宇土郡不知火町大字大見字丸山—

—宇土郡三角町大字大口字大串—

—宇土郡三角町大字大口字要—

1982

熊本県教育委員会

大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群

—宇土郡不知火町大字大見字丸山—

—宇土郡三角町大字大口字大串—

—宇土郡三角町大字大口字要—

1982

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、熊本県土木部の要請により、昭和56年4月20日から同年7月30日にかけて、県道三角・松橋線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

本報告書は、不知火町・三角町の「大見観音崎石棺群」、三角町の「大串古墳」・「要古墳群」に関するものであります。

近世までの三角半島の主要な陸上交通路は、半島の脊梁の南側を通ることから、南岸沿いに多くの埋蔵文化財が存在します。今回の調査により、それ等の一端を知る手がかりを得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施に当たりましては、土木部の御理解と御協力をはじめとして、不知火町教育委員会・三角町教育委員会、地元の方々、調査指導の先生等の御協力を賜りました。

ここに心からお礼を申し上げます。

昭和57年3月31日

熊本県教育長 外 村 次 郎

例 言

1. この報告書は、昭和56年4月20日から7月30日の間に実施した県道三角・松橋線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する報告書である。
2. 出土した人骨の取り上げおよび鑑定は産業医科大学教授北條暉幸先生にお願いし、玉稿をいただいた。深く謝意を表します。
3. 遺物の水洗・接合・実測・写真撮影は、熊本県文化財収蔵庫で行なった。
4. 発掘調査および報告書執筆は、村井真輝・浦田信智が当り、編集は村井が行なった。

本文目次

第I章 序説	
1. はじめに	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 発掘調査日誌抄	2
第II章 大見観音崎石棺群	
1. 位置と現状	17
2. 遺構及び遺物	22
3. 大見観音崎の土層	34
第III章 大串古墳	
1. 位置と現状	37
2. 石室	39
3. 古墳周辺の土層	40
第IV章 要古墳群	
1. 位置と現状	44
2. 遺構及び遺物	44
3. 要古墳群の土層	51
第V章 総論	
1. 大見観音崎石棺群の年代について	53
2. 大串古墳の年代について	54
3. 要古墳群の年代について	54
4. おわりに	56
附論 要古墳出土の人骨について	61

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	大見観音崎石棺群周辺地形図	18
第3図	大見観音崎石棺群地形図その1	19
第4図	大見観音崎石棺群地形図その2	20
第5図	4号石棺L字状溝発掘区域図	21
第6図	第5号石棺発掘区域図	22
第7図	第6・10・11号石棺発掘区域図	23
第8図	大見観音岬石棺見取図	24
第9図	大見観音崎第4号石棺	25
第10図	大見観音崎石棺群第4号石棺出土遺物	26
第11図	大見観音崎石棺群第5号石棺実測図	26
第12図	大見観音崎第6号石棺実測図	28
第13図	大見観音崎第11号石棺	29
第14図	第11号石棺上面採集遺物	29
第15図	大見観音崎「L」字状溝	30
第16図	大見観音崎「L」字状溝の出土遺物	31
第17図	大見観音崎「L」字状溝の出土遺物	32
第18図	大見観音崎第4号石棺近隣の土層断面図	35
第19図	大見観音崎第5号石棺周辺の土層断面図	36
第20図	大串古墳周辺地形図	37
第21図	大串古墳石室周辺地形図	38
第22図	大串古墳石室実測図	39
第23図	大串古墳トレンチ断面図	41
第24図	大串古墳群第7トレンチ断面図	42
第25図	要古墳群周辺地形図	43
第26図	要古墳群発掘調査区域図	45
第27図	要古墳群第3号石棺実測図	46
第28図	要古墳群第4号石棺実測図	47
第29図	第4・5号石棺出土遺物	48
第30図	要古墳群第5号石棺実測図	49
第31図	要古墳群第6号石棺実測図	51
第32図	要古墳群第4・5号石棺周辺土層図	51

附論 1 図 要古墳群第 4 号石棺人骨出土状態	61
2 図 要古墳群第 5 号石棺人骨出土状態	61

表 目 次

第 1 表 宇土半島中部の遺跡名一覧表	4
第 2 表 不知火町・三角町・宇土市の箱式石棺一覧表	7
第 3 表 要古墳群・大見観音崎石棺の尺換算表	57
附論 要古墳出土土人骨所見一覧	62

図 版 目 次

図版 1 遺跡の遠望	63
図版 2 大見観音崎石棺群	64
図版 3 大見観音崎石棺群	65
図版 4 大見観音崎石棺群第 4 号石棺	66
図版 5 大見観音崎石棺群第 4 号石棺	67
図版 6 大見観音崎石棺群第 5・6・11号石棺	68
図版 7 大見観音崎石棺群「L」字状溝	69
図版 8 大見観音崎石棺群「L」字状溝出土遺物	70
図版 9 大串古墳石室	71
図版 10 大串古墳石室	72
図版 11 大串古墳周辺	73
図版 12 要古墳群第 3 号石棺	74
図版 13 要古墳群第 4 号石棺	75
図版 14 要古墳群第 4 号石棺	76
図版 15 要古墳群第 5 号石棺	77
図版 16 要古墳群第 5・6 号石棺	78



第I章 序 説

1 はじめに

県道三角・松橋線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の調査について、熊本県土木部より熊本県教育庁に要請があった。

これを受けて、教育庁文化課は、昭和55年度に現地踏査を実施し、同年度中に発掘調査を行なう計画をたてた。しかし、諸般の事情により、昭和56年度当初に発掘調査を実施することになった。

遺跡が不知火町と三角町に渡っていたために、両町の教育委員会から種々の御援助をいただいた。また、不知火町大字大見・三角町大字大口の両区長には、地元の代表として、色々御協力をお願いした。

調査を実施するにあたっては下記のような調査組織においてこれを行なった。

調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会	
総 括	文化課課長	岩崎辰喜
庶務総括	全主幹	大塚正信
事務担当	全主事	谷喜美子
予備調査	全主幹	上野辰男
調査総括	文化財調査係長	隈昭志
調査事務担当	技師	横尾泰宏
調査担当	技師	村井真輝
	嘱託	浦田信智
専門調査員	産業医科大学教授	北條暉幸

2 遺跡の位置と環境

大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群は三角半島南岸のはほぼ中央に位置する。

三角半島は熊本県の西岸の中央部から西方に突出した半島である。北岸は有明海に面し、対岸には島原半島を望む。南岸は不知火海に面する。

半島の基盤となっている岩石は、中世代の頁岩と砂岩の互層からなっている。その層を突きやぶって新生代の火山（大岳・三角岳）が噴出したと考えられている。三角岳は遠望すると乳

房状を呈する安山岩の山である。大岳は三角半島の中央部をほとんどおおいつくような形に安山岩を噴出して、半島の脊梁を形成している。

半島の南面は大岳山々頂からゆるやかな斜面を描く。北面は急激な斜面となって、海に落ちる。南斜面は気候的に温暖であり、昭和30年代までサトウキビの特産地であった。

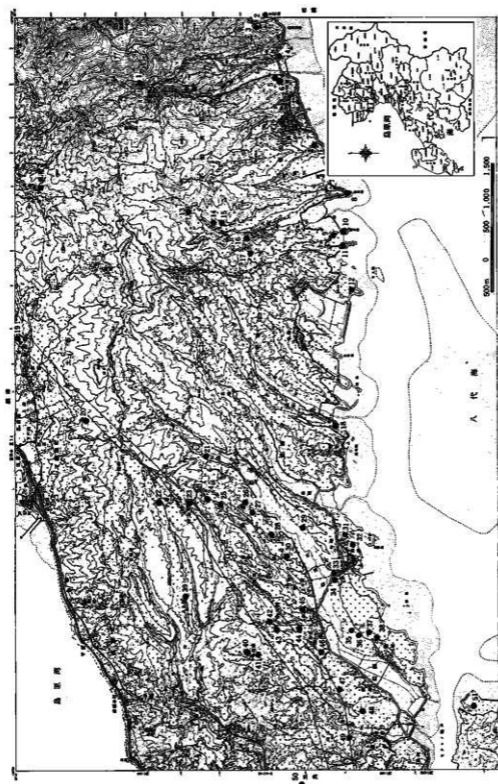
海岸線はノコギリの歯のように出入りしており、岬の先端部には、多くの埋蔵文化財が包蔵されている。また、湾入した部分は近世末から近年に至る干拓が行なわれている。湾の奥は大岳山々頂に向って、谷が発達しており、それ等の谷の一部から製塩・製鉄遺跡が発見されつつある。

南岸ぞいの箱式石棺の分布については以前から知られていた。特に三角町の平松石棺群は有名である。昭和31年から昭和32年にかけて、坂本経典先生等によって「平松石棺群」は調査された。また、「大見観音崎石棺群第1号石棺」は蓋石が凝灰岩製で、取手がついている。このように特異な形状を示すことから、『宇土郡誌』にも紹介されている。

今後、半島のひだ状の谷間に研究者が多く立ち入るようになると、もっと多くの遺跡が確認される可能性が充分にある。

3 発掘調査日誌抄

- 4月20日 取蔵庫より大串古墳へ発掘用具を搬送する。宇城土木事務所との話し合いで、大串古墳・大見観音崎石棺群・要古墳群の順序で調査を実施することにする。立ち木の伐採と伐根が最大の難問となりそうだ。
- 4月22日 大串古墳はこれまで大型の箱式石棺と考えられていたが、肥後型の石障系石室を持つ古墳であることが明らかとなる。
- 4月28日 大串古墳周辺部に7本のトレンチを設定する。石室周辺の表土は全て排除する。土層の観察・周溝の確認作業を開始する。
- 5月1日 大串古墳の実測と大見観音崎石棺群の立ち木伐採および処理を二手にわかれて実施する。
- 5月14日 大串古墳の石室についての調査は終了する。周辺部の土層の観察図づくりが残る。大見観音崎石棺群は平板測量を実施中である。
- 5月20日 農道の中央に大見観音崎石棺群第6号石棺は存在する。当初、不知火町と三角町の両方にまたがっていると思われた。しかし、農道が不知火町の方に拡張されているとのことであり、不知火町側に所属することが明らかとなる。
- 5月25日 大串古墳の調査を終了する。
- 5月27日 大見観音崎石棺群第4号石棺を実測可能な状態で発掘する。第5号石棺は小口石が1枚残るのみである。



第I圖 周辺道網分布圖

第1表 宇土半島中部の遺跡名一覧表 (第1図参照、県文化財所蔵の台帳より作成)

図中 番号	所在地	種別	名称	備考
1	不知火町永尾 古屋敷	散布地	鷹落遺跡	押型文・貝殻条痕文土器散布。
2	全 野呂口	古墳	永尾ノログチ古墳	『不知火町史』に云う「於呂口東箱式石棺」?
3	全 西於呂口	箱式石棺	キツネ塚古墳	『不知火町史』に「孤塚とよばれるところに二基の石びつがあらわれたという」とある。
4	全 五反田	製鉄跡	五反田製鉄跡	
5	全 河添	古墳(円墳)	鬼の岩屋古墳	横穴式石室『不知火町史』
6	全 河添	製鉄跡	たたらん平製鉄遺跡	
7	不知火町松合 和田原	古墳	和田原石棺	消滅? 『不知火町史』
8	不知火町教ノ浦 鳥足岬	横穴墓	鳥足岬横穴群	『不知火町史』のP81に「鳥足岬の尾根の斜面に横穴数個が並び須恵器が出土した」とある。
9	不知火町大見 丸山	古墳(円墳)	大見古墳群	2基の円墳より成る。第1号墳(径約10m)第2号墳(径7~8m)
10	不知火町大見 丸山 三角町大口 大串	箱式石棺	大見観音崎石棺群	二町にまたがる。10基以上の箱式石棺より成る。『不知火町史』今回の調査地。
11	三角町大口 大串	古墳	大串古墳	横穴式石室墳。今回の調査地。
12	全 要	箱式石棺	要古墳群	6基以上の箱式石棺より成る。今回の調査地。
13	不知火町大見 角石	製鉄跡	石だたみ製鉄遺跡	
14	全 朝持鼻	製鉄跡	川原製鉄遺跡	
15	全 神の元	製鉄跡	はねもっこ製鉄遺跡	
16	全 神の元	古塔	殿川五輪塔群	河野家祖先の墓所『不知火町史』
17	全 北園	城跡	大見城跡	
18	三角町里浦 御船	横穴墓	御船横穴群	須恵器。
19	宇土市綱田 水平	製鉄跡	タカラ平製鉄跡	
20	宇土市下綱田	寺院跡	長福寺跡	薬師寺とも云う。
21	三角町郡浦 山田	製鉄跡	山田製鉄跡	
22	三角町郡浦 千房	製鉄跡	千房製鉄遺跡	
23	三角町中村 柳迫	製鉄跡	柳迫製鉄遺跡	
24	三角町郡浦 湯殿	製鉄跡	湯殿製鉄遺跡	
25	全 北平	製鉄跡	北原製鉄遺跡	
26	全 湯殿	製鉄跡	たたらん迫製鉄遺跡	

図中 番号	所 在 地	種 別	名 称	備 考
27	三角町郡浦城山	横 穴	城山横穴群	2基あり。
28	全 城山	製鉄跡	城山製鉄遺跡	
29	全 平野	製鉄跡	平野製鉄遺跡	
30	全 宮ノ脇	製鉄跡	なごさこ製鉄遺跡	
31	全 矢崎	土 墳 墓	矢崎古墳	地下式横穴墓。
32	全 矢崎	城 跡	矢崎城	
33	全 打越平	散布地	打越中原遺跡	土師器。
34	全 打越平	貝 塚	打越南貝塚	
35	三角町前越 竹和田	古墳(円墳)	竹和田古墳	
36	全 西木の浦	古 墳	西木の浦古墳群	
37	全 西木の浦	貝 塚	西木の浦貝塚	
38	全 西木の浦	横 穴 墓	西木の浦横穴群	4基あり。第2号横穴(銅鐙・鉄鉾・鉄刀・鉄鎌・須恵器)、第4号横穴(銅環・金環・鉄刀・土師器)
39	三角町中村 八久保	碑	八窪寺尾氏墓碑	
40	全 中河原	製鉄跡	中河原製鉄跡1	
41	全 中河原	製鉄跡	全 2	
42	三角町中村 段原田	製鉄跡	古舞池製鉄遺跡	
43	全 大平	製鉄跡	宮迫製鉄遺跡	
44	全 文蔵	貝 塚	文蔵貝塚	弥生後期・縄文時代。
45	全 文蔵	古 墳	上本庄古墳群	2基あり。
46	全 文蔵	土 墳 墓	本庄地下式土墳群	
47	三角町前越 清水	貝 塚	くのざこ貝塚	須恵器、土師器、鎌。
48	全 大鹿里	古 墳	鬼塚古墳	
49	三角町中村 前田	古 墳	金桁古墳群	3基あり、第1号墳(直刀、劍、勾玉、人骨)
50	三角町波多 平松	古 墳	平松古墳群	15基あり。『平松箱式石棺群』坂本経典氏調査
51	三角町戸馳 鬼塚	古 墳	鬼塚古墳	須恵器器

- 6月3日 第4号石棺の調査は掘り方の実測のみを残す。第5号石棺の実測は終了する。第6・9・10号石棺の周辺を発掘開始する。
- 6月8日 第4号石棺の調査を終了する。第9号石棺と思われた石材は第6号石棺の一部が開墾の時移動したと推測される。上記のことから第9号石棺は存在しない。第10号石棺は、掘り方までブルドーザーで削り取られており、石材が出土した附近に石棺が存在したことが推測される。
- 6月9日 第11号石棺の実態が明らかになる。主な石材は黒色の頁岩、一部に安山岩（蓋石？）を使用する。床には小礫をひき、赤色顔料を多量に含む。
- 6月18日 第4号石棺南側から検出した「し」字状の溝の発掘が終了した。溝は方形にまわる可能性が考えられる。出土遺物は土師器の小型丸底壺、高環、甕・壺である。
- 6月23日 浦田は上記の溝の実測を行なう。村井は要古墳群のミカンの伐採と伐根を開始する。
- 6月29日 要古墳群第5号石棺周辺の発掘を行なう。
- 7月3日 要古墳群第3号石棺周辺の表土を排除する作業に取りかかる。木の根が多くて作業が難行する。にわか雨が降り出し、作業員一同ずぶぬれとなる。
- 7月7日 激しい夕立あり。またもずぶぬれとなる。ほとんど作業出来ず。
- 7月8日 第3・4・5号石棺から人骨が検出される。第3号石棺からは歯のみである。第4号石棺からは3体の人骨が検出される。第5号石棺からは2体の人骨が検出される。隈係長に人骨が出土したことを電話で報告、人骨の取り上げについて検討するように依頼する。
- 7月15日 人骨を取り上げ可能な状態まで作業を進める。
- 7月16日 北條暉幸先生（産業医大教授）に依頼して、人骨を取り上げていただく。隈係長も協力する。
- 7月17日 北條先生、昨日に引き続き、人骨を取り上げられる。
- 7月21日 終日、石棺の実測におわれる。
- 7月27日 棺材のぬき取り作業を行なう。移転して保存することを考えて、石材をいためぬよう慎重に行なう。
- 7月28日 第5号石棺北側に検出された第6号石棺の調査も終了する。石材のほんの一部を残すのみであった。道路建設予定地内に30～50cm間隔でボーリングステッキを立ててみる。石棺の存在は確認できず。
- 7月30日 発掘用器材を荷造りして、収蔵庫へ返送する。作業員一同、無事調査が終了してほっとする。
- ※（追記） 三角町教育委員会は、三角町大口在住の林田浩氏の協力を得て、同氏のミカン園に、要古墳群第3・5号石棺を移転・復元を行なった。

第2表 不知火町・三角町・宇土市の箱式石棺一覽表
(本表作成に當つて文献らんに示した資料の外、佐藤伸二氏の調査資料を參考とした。)

番 号	石棺(葬)名 (異 称)	所 在 地	外 部 概 況			内 部 概 況				装 飾 者			備 考	文 献		
			墳形	規模	周溝の有否	その他	墓 室	主 体	床 面	主軸の方位	石材	副葬品			性別	数
1	出町A遺跡 箱式石棺	宇土郡 不知火町 御嶺出町							長さ 0.93 m	幅 0.57 m	深さ 0.13 m	礎 床				不知火町史 昭和7年 不知火町
2	十五社箱式石 棺群 1号石棺	宇土郡 不知火町 高良神ノ元														
3	◇	◇														
4	2号石棺	◇														
5	3号石棺	◇														
5	八久保古墳	宇土郡 不知火町 長崎字八久保	墳形 円墳	径約 10m 高さ 70cm												不知火町史 昭和7年 不知火町
6	東屋屋浦 箱式石棺	宇土郡 不知火町 東屋屋浦	墳形 円墳	径約 12m 高さ 1m												◇
7	弁天山石棺 群 1号石棺	宇土郡 不知火町 長崎弁天山														備後庵に 弁天山古 墳あり
8	◇ 2号石棺	”														”
9	二本松 箱式石棺	宇土郡 不知火町 二本松														
10	於呂口東 箱式石棺	宇土郡 不知火町 永尾字於呂口														不知火町史 昭和7年 不知火町

宇土郡不知火町

宇土郡不知火町

番号	石棺(葬)名 (奥格称)	所在地	外部施設			内部施設			被葬者			備考	文献	
			墳形	規模	周壁の有無	遺物	その他	墓址	主室	副室	性別			数
11	狐塚古墳 1号石棺	宇土郡 不知火町 永尾字於呂口												不知火町史 昭和7年 不知火町
12	2号石棺	*												*
13	和田原石棺	宇土郡 不知火町 松合和田原												*
14	大見観音崎 石棺群 1号石棺	宇土郡 不知火町 大見字丸山												蓋石に 取手有 り
15	2号石棺	*												畑に石 材埋設 破壊
16	3号石棺	*												
17	4号石棺	*					長 2.1m 幅 1.0m 高さ 0.2m 築地方形	推定 約 1.8m	0.41 m	0.26 m				中央付込 に石棺 として1枚
18	5号石棺	(宇土郡三島町) 大口字大口 であるがこ こに記す。												野石及び 灰層の一 部のみ残 存
19	6号石棺	宇土郡 不知火町 大見字丸山					長 2.3m 幅 0.8m 築地方形	推定 2.35 m	0.5 m					石棺基部 3分の1 は土に 埋没
20	7号石棺	*												

宇土郡不知火町

番号	石棺(葬)名 (奥 称)	所在地	外部施設			内部施設				副葬品	被葬者			備考	文献	
			墳形	規模	遺物の 種類	その他	基 壇	主 軸	主 軸の 方 位		石材	性別	数			頭位
21	大草野音崎 石棺群 8号石棺	宇土郡 不知火町 大見字丸山									安山岩					
22	9号石棺	◇													欠番	
23	10号石棺	◇									砂 岩				石材片 のみ埋 戻	
24	11号石棺	◇				長 2.2m×0.76m 幅 0.3m 厚 0.3m 隅丸底方形			礎 床	N 45° W	主に瓦 土質の 石を 使用				破損・遺 灰及び石 材の一部 のみ埋戻	

宇土郡三角町

番号	石棺(葬)名 (奥 称)	所在地	外部施設			内部施設				副葬品	被葬者			備考	文献	
			墳形	規模	遺物の 種類	その他	基 壇	主 軸	主 軸の 方 位		石材	性別	数			頭位
1	要古墳群 1号石棺	宇土郡三角町 大口字峯									安山岩				石棺上面 のみ埋戻 未調査	
2	2号石棺	◇									安山岩				石棺上面 のみ埋戻 未調査	
3	3号石棺	◇				長 1.75m 幅 0.46m 隅丸底方形		礎 床	N 31.5° E	砂 岩					佛の み 骸 出	
4	4号石棺	◇				長 1.76m 幅 0.44m 隅丸底方形		礎 床	N 28.5° E	砂 岩					刀子1 1号 2号 女性 3号	

宇土郡三角町

番号	石棺(群)名 (名称)	所在地	外部施設			内部施設			設置			被葬者			備考	文献	
			墳形	規模	埋葬の 苦否	遺物	その他	墓誌	主室	体部	床面	主軸の 方位	石材	副葬品			性別
5	要古墳群 5号石棺	宇土郡三角町 大口字要					長 1.65 m 幅 0.39 m	深さ 0.28 m	副葬品 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器 土師器	N 64° W	砂 岩	管玉 2	1号 2号	2体	1号墓 2号西 寄り		
6	◇ 6号石棺	◇									礫床						石棺の開口 が土師器一帯 の間にあり 土師器の 蓋が代わい り
7	新地古墳	宇土郡三角町 郡浦字新地															三角町平松古墳 群の副葬品 基本形
8	金術古墳 1号石棺	宇土郡三角町 郡浦字新田					長さ 2.74 m 幅 0.73 m	0.6 m				鉄刀 鉄剣 勾玉	5体				◇
9	◇ 2号石棺	◇															◇
10	平松古墳群 1号石棺	宇土郡三角町 大字波多字平 松					長さ 2.30 m 幅 0.65 m	0.46 m	粘土床			鉄剣 1	2体	東			◇
11	平松古墳群 2号石棺	宇土郡三角町 大字波多字平 松					長さ 1.81 m 幅 0.63 m	0.48 m	粘土床			鉄片 2					◇
12	◇ 3号石棺	◇					長さ 2.55 m 幅 0.75 m	0.47 m	敷石 石床			鉄剣 3 刀子 1 小玉 8	3体	東西			◇
13	◇ 4号石棺	◇					長さ 2.05 m 幅 0.53 m	0.45 m	粘土床			鉄剣 1 小玉 51	5体	東西			◇
14	◇ 5号石棺	◇					長さ 2.02 m 幅 0.48 m	0.45 m	粘土床								◇

宇土郡三角町

番号	石棺(附名)(漢称)	所在地	外 形			外 形			内 部			敷 蓋			墓 葬 者		備考	文 献
			墳形	規模	周溝の存在	遺物	その他	墓 蓋	長さ	幅	高さ	床面	方位	石材	副葬品	性別		
15	平松古墳群 6号石棺	宇土郡三角町 大字波多字平 松																三角町平松墳 群古墳群調査 報告書(昭和 四十七年度)
16	6号石棺	◆														2体	東	◆
17	7号石棺	◆																◆
18	8号石棺	◆																◆
19	9号石棺	◆																◆
20	10号石棺	◆																◆
21	平松古墳群 14号石棺	◆																◆
22	1号墳	◆	円墳	直径 1.3m 高さ 2.5m														◆
23	2号墳	◆	円墳	直径 1.1m 高さ 2m														◆
24	3号墳	◆	円墳	直径 1.4m 高さ 3m														◆

宇土郡三角町

番号	石棺(新)名 (異称)	所在地	外形			高さ			内			被葬者			備考	文献	
			墳形	規模 長さ 高さ	埋葬 者名	通物 その他	墓誌	長さ	主 体 備	深さ	床面	主軸の 方位	石材	副葬品			性別
25	平松古墳群 4号墳	宇土郡三角町 大字波多字平 松	円墳	直径 4m 高さ 2m													三角町平松古墳 群調査報告書 系本環集
26	島崎古墳群	宇土郡三角町 波多原廣															破壊
27	越路古墳群 1号石棺	宇土郡三角町 波多越路															破壊
28	礪山古墳群 1号石棺	宇土郡三角町 三角浦志水															
29	◆ 2号石棺	◆															◆
30	◆ 3号石棺	◆															◆
31	◆ 4号石棺	◆															◆
32	大崎古墳群 1号石棺	宇土郡三角町 戸野大崎															◆
33	◆ 2号石棺	◆															◆
34	3 3号石棺	◆															◆

宇 土 市

番号	石棺(葬)名 (漢 称)	所 在 地	外 部 施 設			内 部 施 設			設		製 品	被 葬 者		備 考	文 献	
			墳形	規模	周壁の 存否	其他 遺物	墓 址	主 体 部	主 體 部	主 體 部		主 體 部	石 材			性 別
1	南山内石棺 群 1号石棺	宇土市松山町 南山内2123番 地					長 1.9 m 幅 0.23 m 底 1.8m×0.75m 深 0.44m 隅丸長方形	粘土床	N 47° E	安 山 岩					北側に 石枕有 り	宇土市史蹟考 (昭和49) 昭和49年1月 宇土市 教育委員会
2	2号石棺	◇					長 1.92 m 幅 0.42 m 底 2.7m×1.35m 隅丸長方形	粘土床	N 38.5° W	安 山 岩	刀子1	男	1体	西	◇	
3	3号石棺	◇					長 1.95 m 幅 0.52 m 底 2.5m×1.0m 深 0.30 隅丸長方形	粘土床	N 51.5° E	安 山 岩	刀子1				◇	
4	上松山箱式 石棺	宇土市松山町 原屋敷									鏡 1					
5	古保里石棺 群 1号石棺	宇土市古保里 町八津江									刀子 1 体 3					
6	◇	◇									鏡 1 勾玉 1					
7	◇	◇														
8	◇	◇														
9	◇	◇														
10	鎌目墓跡 1号石棺	宇土市鎌目町 西原														鎌目西原墓 跡 100号年 宇土市 教育委員会

宇土市

番号	石棺(碑)名 (異称)	所在地	外部施設			内部施設				副葬品	被葬者			文献				
			墳形	規模	周囲の 規模	遺物 その他	墓 基	墓 基	長さ		幅	深さ	床面		主軸の 方位	石材	性別	数
11	境目遺跡 2号石棺	宇土市境目町 西原																境目遺跡 1999年 宇土市教育委員会
12	◆ 3号石棺	◆																◆
13	◆ 4号石棺	◆																◆
14	◆ 5号石棺	◆																◆
15	◆ 6号石棺	◆												小玉1				◆
16	◆ 7号石棺	◆																◆
17	◆ 8号石棺	◆																◆
18	西岡台遺跡 箱式石棺	宇土市神馬町 西岡																宇土市教育委員会 (宇土市文化財科) 調査書(1巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(2巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(3巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(4巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(5巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(6巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(7巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(8巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(9巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(10巻) 1977年
19	柳沢石棺	宇土市佐野町 柳沢																宇土市教育委員会 (宇土市文化財科) 調査書(1巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(2巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(3巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(4巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(5巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(6巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(7巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(8巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(9巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(10巻) 1977年
20	長浜箱式石 棺群 1号石棺	宇土市長浜町 牧の蓮																宇土市教育委員会 (宇土市文化財科) 調査書(1巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(2巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(3巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(4巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(5巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(6巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(7巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(8巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(9巻) 1977年 宇土市教育委員会 調査書(10巻) 1977年

宇 土 市

番 号	石棺(葬)名 (原 形)	所 在 地	外 部 施 設			内 部 施 設			調 査 品	被 葬 者		備 考	文 献
			墳形	規模	彫刻の 有 否	遺物 其 他	墓 址	主 体 部		主軸の 方 位	石 材		
						長さ	幅	高さ	床 座				
21	長浜式石棺 群 2号石棺	宇土市長浜町 牧の遺											宇土市史(昭和11) (宇土市文化財調査 報告書1冊) 宇土市教育委員会
22	城箱式石棺 群 1号石棺	宇土市上綱田 町字城											城箱式石棺 群(宇土市史) 昭和11年 宇土市教育委員会
23	2号石棺	◆											◆
24	3号石棺	◆											◆
25	4号石棺	◆											◆
26	5号石棺	◆											◆
27	6号石棺	◆											◆
28	マブシ古墳 群 1号石棺	宇土市下綱田 町字廻屋											◆
29	2号石棺	◆				1.93 m	0.78 m	0.84 m	礎 床			石石のみ 出土 長さ 2.25m	
30	3号石棺	◆				1.26 m	0.43 m	0.46 m	礎 床				◆

宇土市

番 号	石棺(葬)名 (奥称)	所 在 地	外 部 施 設		内 部 施 設			墓 葬 者		備 考	文 献	
			墳形	規模	周溝の有 否	遺物の 通物	その他	墓 址	主 体 部			副葬品
			高さ	深さ	床面	土物の 方位	石材					
31	マアジ古墳 4号石棺	宇土市下福田 町字福屋										消滅
32	5号石棺	◇										丹のついた五 砂利のみ確認 破壊?
33	6号石棺	◇					凝灰岩					小口石のみ確 認 未調査
34	7号石棺	◇										丹のついた五 砂利のみ確認 破壊
35	8号石棺	◇										丹のついた五 砂利のみ確認 破壊、石割片 確認 破壊
36	9号石棺	◇										

原本表作成に当り、佐藤伸二・平山修一・高木恭二・木下洋介・島津謙昭・野田拓治各氏の助言を受けた。

第Ⅱ章 大見観音崎石棺群

1 位置と現状

宇土半島の脊梁を形成している主嶺大岳山（海拔477.6m）から南方に流れ下る尾根の先端は岬となって不知火海に没する。それ等の岬の内、四つが大見（不知火町）と大口（三角町）の間に存在する。大見観音崎はそれ等の中で一番東側の岬である。

大見観音崎は大見川の右側（西岸）に位置する。大見川の川口一帯は干拓が行なわれて、陸化しているが、近世までは入江が深く湾入していた。この岬の先端は南方に突出し、三方は高い海蝕崖となっている。基盤をつくっている岩石は大岳山の噴出物（集塊岩・安山岩質）から成る。

岬の上部は海拔20～25mの狭い平地があり、果樹園と雑木林となっている。岬の基部から尾根の上に南北に走る農道がある。この農道が不知火町大字大見字丸山と三角町大字大口字大串との境界となっている。農道の西側には土塁（高さ0.5～1.2m、幅1～2m、長さ100m）が残る。この土塁を「シシカベ」と呼び畑の作物をシカヤイノシシの被害から守るために構築されたものと言う。シシカベはこの附近一帯においては、近年までは多く見うけたが、昨今の農業機械導入のさまたげになるため消失してしまったとのことである。

岬の東側に観音堂が存在する。内部に石造の聖観音座像を安置する。この観音堂は、豊田千里氏の管理下に有り、同家の古記録によると江戸時代後期に建立されたと伝える。また、観音堂の西側の平担部（今回の発掘調査地）には相撲の土俵があり、奉納相撲が近年まで行なわれていた。

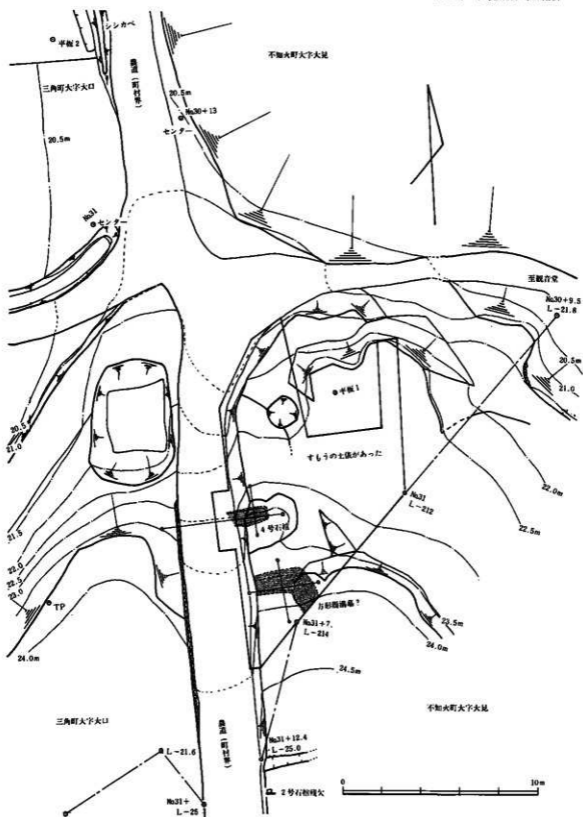
観音堂の南側、第1号石棺が埋蔵されている畑の近くには戦前まで火葬場があったと伝える。火葬のための炉の形状は隅丸の長方形であった。指の大きさの鉄筋のすのこがあり、炉の天井部や煙突は持たなかった。このような炉の形状については近隣の町村においても類例を古老より聞いたことがある。葬儀のための通路は観音堂の境内を通らないような道が岬の東側に通じていたと言う。この道を「火葬場道」と呼ぶ。現在は完全に廃道となっていて、消失している。

『不知火町史』には、「岬の基部は『よみど』とよばれる尾根で、河口にのぞむ丸山に石棺が掘りだされたことがある。更に河口の東の岬、鳥足岬の尾根の斜面に横穴数個が並び須須器器が出土した」とある。

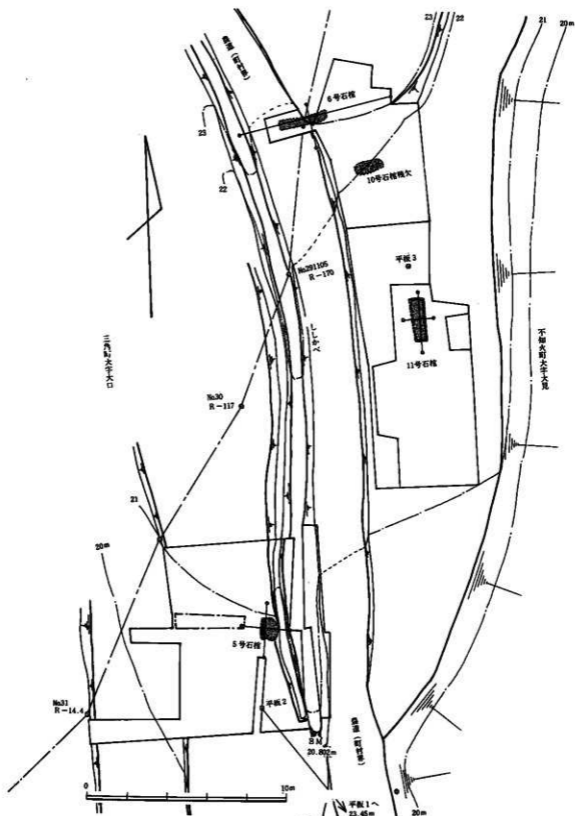
岬の基部の東側、町史に言う所（大字大見字丸山）には2基の円墳が存在する。大見古墳群1号墳（一部が削られているかほぼ完形。径約10m、高さ約2m）・2号墳（一部を開壘、径約7m、高さ2m）がそれである。



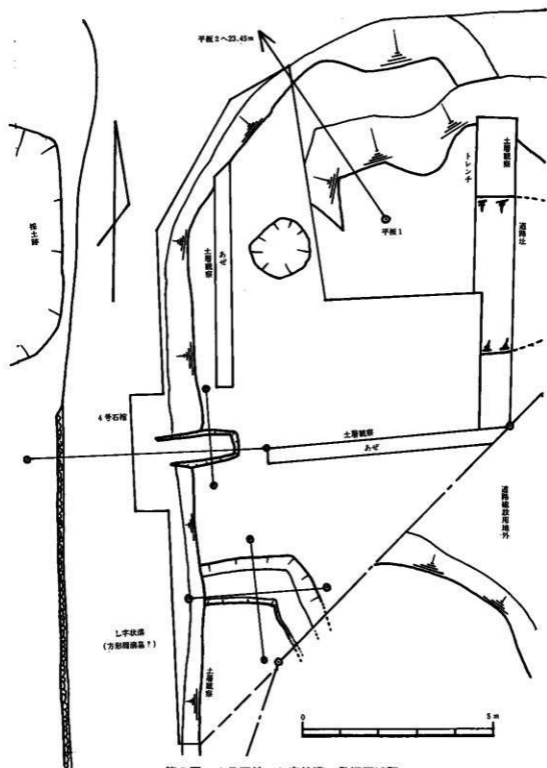
第2図 大見観音峰石棺群周辺地形図



第3図 大見観音崎石棺群地形図その1 (等高線は発掘前の地表面)



第4図 大見観音崎石塚群地形図その2 (等高線は発掘前の地表面)



第5図 4号石棺・L字状溝 発掘区域図

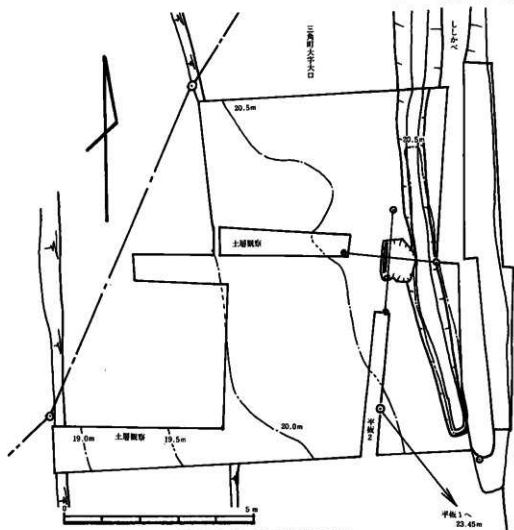
岬に分布する石棺の正確な基数は不明である。従来6基存在すると言われていたが、今回の調査では10基以上存在することは明らかである。ほとんどの石棺が露出している。理由は、開墾と採土による。この一帯の畑は、普通作（麦・イモ）・ナシ園・サトウキビ・ミカン等が栽培された。作物が変化したり、耕作を休んだりするたびに開墾及び圃場の整備が行なわれてきた。特にミカン園の造成にはブルドーザーが導入されたため、地形が少し変化した。

2. 遺構及び遺物

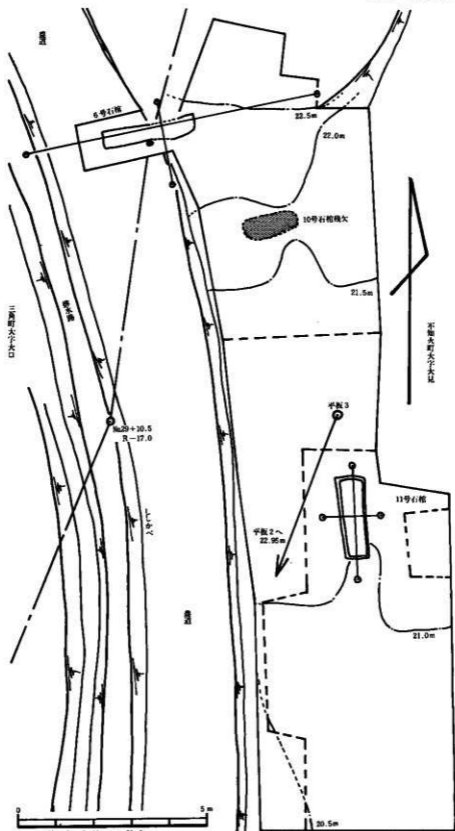
(1) 第1号石棺（第8図）

『不知火町史』と『宇土郡誌』に記載有り。今回の調査区域外に存在するので町史（80頁）を参照してここに述べる。

石材は凝灰岩であり、板状の4枚の石材を使用した組合わせ式の石棺である。接合部は溝と



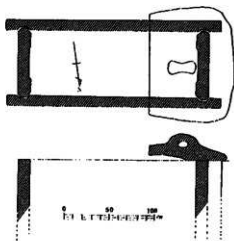
第6図 第5号石棺発掘区域図



第7图 第6・10・11号石棺発掘区域图

柄をつくっている。主軸はほぼ東西、内法183cm、幅73cmを測る。深さはボーリングによると約1mと推定される。床は粘土床と推定される。

蓋は縦84cm・幅120cm・厚さ14cmを測る。蓋の内面は棺身に合わせて、幅64cm・入り55cmの凹みを穿つ。外面の中央には把手を造り出す。宇土郡誌には、把手は三つ有ると記されているので、三枚の内二枚の蓋石を欠失したと思われる。また、朱結の人骨が出土したとも伝える。



第8図 大見観音岬石棺見取図
(不知火町史80頁より)

(2) 第2号石棺

「L」字状溝の南側10mの位置に棺材のみ露出する。畑地の開墾と農道建設によって出土したと思われる。石材は砂岩であり、破損して旧状はほとんど止めていない。石材と石材との間に粘土が付着していた。第4号石棺に類似した石棺と推定される。「L」字状溝が方形周溝墓の一部と仮定した場合、この石棺は周溝墓の主体部ではと、色めきだって考えてみたが、その可能性は少ないと思われる。路線外のため未調査である。

(3) 第3号石棺

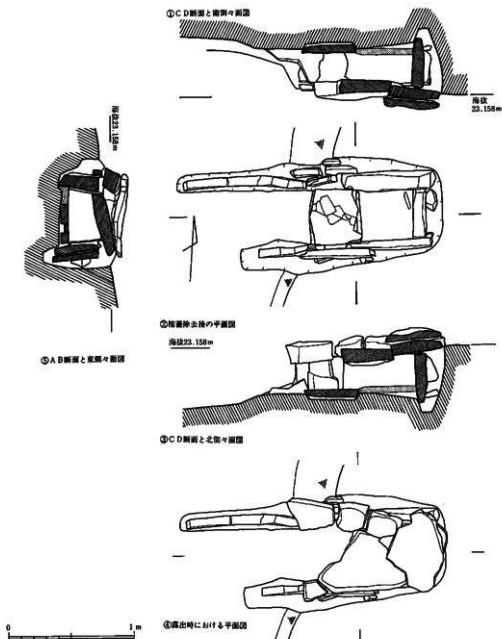
観音堂境内の南側の崖に断面が露出している。石棺の上にはヤマモの木が生い繁り、根の間に取り込まれている。安山岩の板状の石材を組合せた石棺である。主軸の長さ2m・幅0.5m程度の大きさと推定される。主軸の方向は北東と思われる。住民の話では、戦前から露出していたとのことである。路線外のため未調査である。

(4) 第4号石棺 (第9図)

本石棺は、調査対象区域の一番南側に位置し、主軸をN-86°-Eにとり埋置されている。調査当初、石棺西側は約半分程、畑地開墾のための農道建設によって破壊されていた。しかし、北側側石の下部が完全に遺存していた為、ほぼ完全に復元することができた。

石棺全長は、内法(推定)約1.8m・幅0.41mを測り、棺材はすべて砂岩を使用している。側石は、3枚ないし4枚の板状の砂岩を交互に立て、ところどころに拳大程の自然石を墓壇に入れ棺材のささえをしている。

棺内床面は礫床で、径1cm程の自然礫を5cm程の厚さに敷いており、全面に赤色顔料を塗布

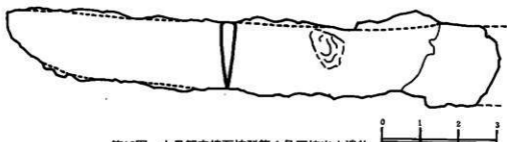


第9図 大見観音崎第4号石棺

している。また、石棺床面中央部付近には、礎のかわりに地山を掘り込み板状の砂岩を敷いている。

棺内より、東側小口石付近に切先を北側に、刃部を内側に向けた刀子が1本床面より出土した。また、人骨の遺存を認められなかった為、被葬者の埋葬状態・頭位等は不明である。

蓋石は、石棺上部に雑木が生えていた為、東側の半分程が当時のままに残っていた。板状の砂岩を2枚重ねている。



第10図 大見観音峰石棺群第4号石棺出土遺物

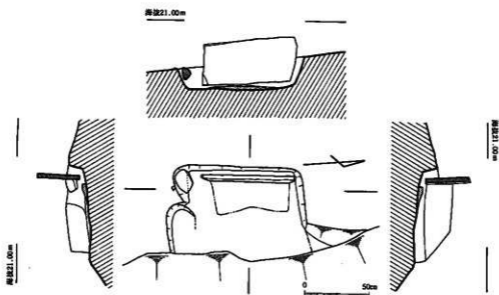
墓抔は、安山岩の風化土を掘り込んでおり、現存値で長辺（推定）2.14m・短辺0.85mの隅丸長方形を呈していると推察される。北側長辺部は、石材を埋める部分でもう一段の掘り方を設け、二段の墓抔を有する。また、墓抔と石材の間には粘土のかわりに黄色の土を詰めている。周溝の存在は確認されなかったので、持たない可能性が強い。

出土遺物（第10図）

刀子 基部を欠失しており、現存長12.8cm・刃部幅1.7cm・鋒厚0.4cmを測る。背は稍反りを有し、刃先は少し丸くなる。

(5) 第5号石棺（第11図）

安山岩の側壁（幅74cm・高さ33cm・厚さ4cm）を残すのみである。主軸の方向はほぼ東西（N-85.5°-W）である。東側は果樹園の排水路で切られているので不明である。排水路をこえたシシカベの下に遺構はない。ししかべは表土の上に盛土した土塁である。



第11図 大見観音峰石棺群第5号石棺実測図

掘り方の幅は1.1mを測る。掘り方より復元した棺の大きさは、長さ1m・幅0.8m・深さ0.35mと推定される。

床は礫床であり、大豆の大きさの小礫をひいた床面が一部残存した。遺構の周辺部はよく耕されており、表土の下は基盤の火山噴出物である。

存在する地点は三角町大字大口字大串に所属する。先にも述べたように農道が町の境界となっているためである。

周溝は確認されなかったので、持たないと思われる。

(6) 第6号石棺 (第12図)

農道を横切る形で存在する。当初、三角町と不知火町とに渡ると考えられたが、農道が不知火町側に拡幅されたことから、不知火町に所属すると判断される。

この石棺は農道・民有地・道路予定地に渡っているために、発掘調査を実施するのに苦慮した。しかし、道路建設工事によっても遺構の部分が削平されないことが明らかになったので、上面の観察に止めた。

棺材は黄褐色の砂岩である。主軸の方向はほぼ北北東(N-79°E)である。石棺の大きさは、長さ2.35m・幅0.5mを測る。石棺の幅は、西側が東側より0.1~0.15cm広い。深さは、道路予定地内において0.3mを測る。床は礫床であり、礫の大きさは大豆の大きさ程度である。棺の内面には赤色顔料を塗布している。棺材の組合せ方は小口の方が内側に入っている。

掘り方の大きさは、長さ2.5m・幅0.66mを測る。深さは、棺材の下部は深く(0.5m以上)掘り下げており、床の下面は0.35m程度である。

周溝は発掘した範囲内では検出できなかったので、持たないと推定される。

(7) 第7号石棺

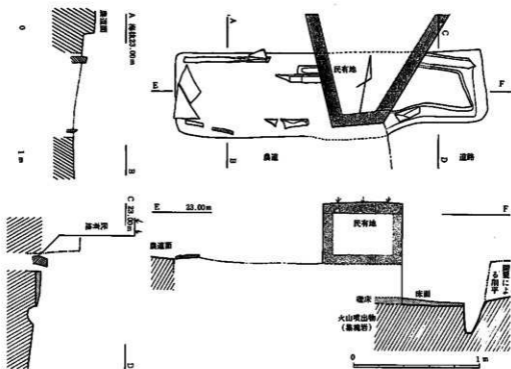
第6号石棺の北西30mに存在する。周辺はミカン園であり、園内の崖面に小口の部分が露出している。石材は砂岩である。道路敷地外のため未調査である。

(8) 第8号石棺

第3号石棺の南側2mに存在する。周辺は雑木林である。安山岩の側壁1枚を残すのみである。他は採土のため欠失したと考えられる。道路敷地外のため未調査である。

(9) 第9号石棺 (欠番とする)

第6号石棺に接するように石材(砂岩)が露出していた。調査によって第6号石棺の一部であることが明らかとなった。



第12図 大見観音崎第6号石棺実測図

⑩ 第10号石棺

第6号石棺の南方3～4mの所に棺材(砂岩)が露出していた。発掘調査を実施したが、掘り方も無くなるまでブルドーザーで削平しており、旧状は完全に不明である。石材の量と分布状態および地形から石棺が存在したと推定される。

⑪ 第11号石棺(第13図)

地表に黒色の頁岩と安山岩の板状石が露出していたことから、石棺の存在が明らかとなる。ブルドーザーによる削平のため床面のみを残して、側壁は10cm四方程度に砕けている。

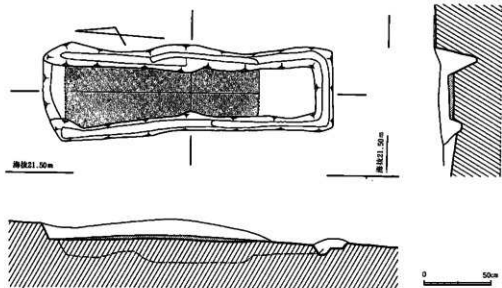
残存する掘り方から、東側側石は3枚・西側側石は2～3枚・南北両小口は各1枚ずつと推測される。石材は黒色の頁岩を主に使用し、一部に安山岩(蓋石?)を使用している。

床は礫床であり、直径1cm程度の小礫を使用している。礫床の厚さは4cmを測る。床及び石材の内面には多量の赤色顔料を塗布している。

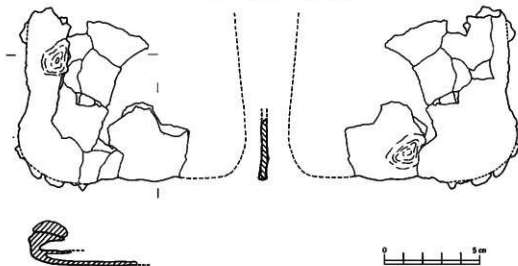
主軸の方向は南北(N-E-W)にとり、長さは、内法1.95m・外法2.2mを測る。幅は、内法0.46m・外法0.74mを測る。しかし、この大きさは残存した床面と掘り方より計測した。

掘り方は基盤となっている火山噴出物の中に設けられている。出土遺物としては、石棺周辺部より第14図に示す鋤先を採取している。

周溝の存否については、ブルドーザーによる削平が行なわれているため、確認できなかった。



第13図 大見観音崎第11号石棺

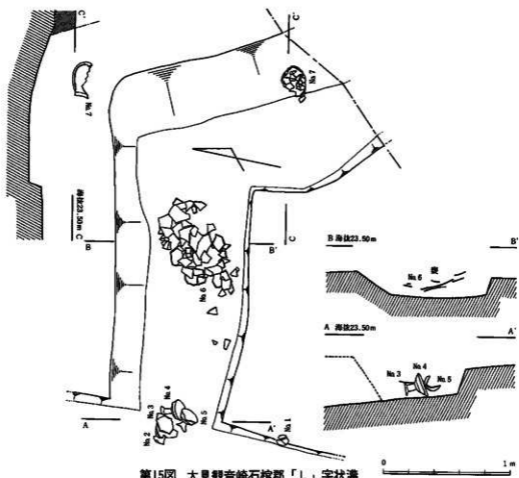


第14図 第11号石棺上面採集遺物（鐵先）

石棺周辺表採遺物（第14図）

鐵先 11号石棺上部の攪乱層より表採したものである。出土地は機械により整地されており、粉々の状態で採集された。復元の結果、左側辺部が欠失しているが、全長9.1cm、幅（推定）12cm前後、厚さ0.3cmを測る。

この鐵先は、長方形の鋼材を2つに折り曲げた後、左右の端を幅2cm・長さ7cmずつ折り曲げて、装着部を造り出している。このことは、鋼材が2枚に剝離している部分の観察から推定できる。かなり風化が進んでいる。サビにより膨れた部分や剝離した部分が多く、鐵先と推定したが、鉞の可能性も残る。



第15図 大見観音崎石棺部「L」字状溝

① その他の石棺

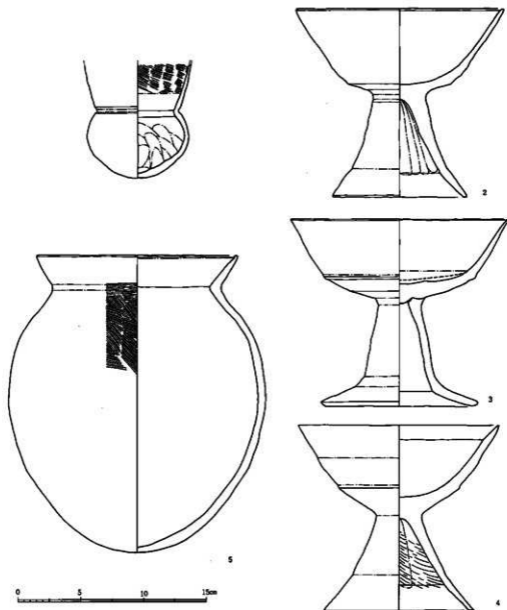
第7号石棺周辺部の石垣には、砂岩の板状石が使用されており、他に数基の石棺が存在したことが推測される。また、この畑からは須恵器が表採されており、近くに大見古墳群（1号墳・2号墳）が存在する。

第3・8号石棺の近くに採土した跡が残る。この採土は岬の東側にある干拓堤防の改修工事（昭和20年代？）の時なされた。その時、石櫃が出土したとの話を聞いた。出土遺物としては刀があったとも聞く。話の様子から、石棺の存在が推測される。

この岬の西側の谷底近くにも石棺が出土したとの噂を聞いたが、事実かどうか、確認できなかった。

② 「L」字状溝（第3・5・15・16・17図）

第4号石棺と第2号石棺の中間より検出する。第4号石棺の南側3mに位置する。現地は邑（不知火町大字大見）の元共有地であった。上物としては雑木（ハゼ、カシ、シイ等）が生い

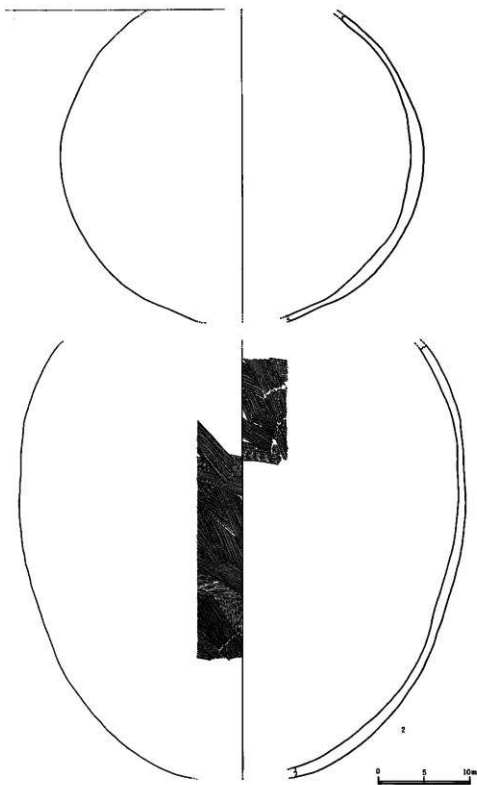


第16図 大見観音崎石棺群「L」字状溝の出土遺物

繁っていたので、大きな木は旧地主の手で、小さな木や竹あるいは枝打ちで残った物は調査員の手で処理した。

第4号棺と「L」字溝が検出された場所はなだらかな斜面であり、その下の平担部に相摸の土俵が造られていたとのことである。

表土を剥くと、安山岩の風化した粘性の強い土に炭素を含む土が検出され、第15図Na7の甕を検出した。この炭素を少量含む暗褐色の土を発掘したところ、第15図に示すような「L」字状の溝が検出された。溝の西側は農道建設で切られていて、南側は路線外のため発掘不可能で



第17図 大見観音崎石棺群「L」字状溝の出土遺物

ある。溝の屈曲の様子から、方形にめぐる溝の一部である可能性がきわめて大きいと推測される。主体部については、全く明らかでない。現地の様子から、第2号石棺ではとの説もあったが可能性は薄いと思われる。

検出した溝の幅0.9～1.2m・深さ1.1～0.4mを測る。溝の底は、西の方にゆるやかに斜んでいる。断面の形はほぼ逆台形である。

遺物の検出状態は第15図に示す。小型丸底壺（No.1）は溝より内側から出土する。三点の土師器高坏（No.2・4・5）と土師器の甕の破片は溝の西の端にかたまって出土した。No.6は土師器の壺の破片群であり、接合したところ第17図に示す二個体分であることが明らかとなった。No.7は土師器の甕である。

No.1～5は床面直上から10cm以内に出土したが、No.6～7は床面上10～30cm浮いた状態で出土した。このことから、No.1～5は埋納された当時の姿を残していると推定される。

大見観音崎石棺群「L」字状溝の出土遺物（第16図）

1. 土師器小型丸底壺 第15図中のNo.1に出土地点を示す。内外面ともに器面の荒れが激しく、調整痕の残りが少ない。口縁部内面にハケ調整の跡がうっすらと残る。底部および胴部の内面には指の圧痕が残り、指によるなでによって調整がなされたと推測される。胎土はほとんど砂粒を含まない。口径が胴部の最大径より大きくなると推定される。

口唇部を欠失するので器高は不明である。胴部の最大径8.1cm・頸部の径6.6cmを測る。

2. 土師器高坏 第15図中のNo.2に出土地点を示す。内外面ともに器面の荒れが激しい。脚部内面にわずかにへら削りの跡が残る。脚部と坏部との接合部の外面に手によるなでの痕跡が観察される。胎土中に白色の造岩鉱物を含む。

器高14.9cm・坏部の径16.5cm・復元した脚部底径の10.6cmを測る。

3. 土師器高坏 第15図中のNo.4に出土地点を示す。器面の荒れが激しく、調整痕も観察不能である。器表には小さなひび割れが生じており、手をふれるたびに小さく割れる。胎土中に白色の造岩鉱物を含む。また、径0.4cmほどのチャートの小礫1個が目にとまる。

器高14.8cm・坏部の口径17.3cm・脚部底径12.4cmを測る。

4. 土師器高坏 第15図中のNo.5に出土地点を示す。内外面ともに激しく器面が荒れている。脚部内面は一気にへら削りしたと思われる。胎土中の砂粒の痕がラセンを描くような状態で削りの痕がうっすらと残る。胎土中に白色の造岩鉱物を含む。口唇部および脚底部は内質が剥離して刃物の刃部のような形になっている。

器高14.6cm・坏部の口径16.0cm・脚底部の径12.0cmを測る。

5. 土師器甕 第15図中のNo.7に出土地点を示す。外面の頸部には横方向のハケ目となでによる調整の痕が観察される。頸部より底部までへらによる調整の痕が器面の荒れが少ない所に点

々と残る。内面には右上の方向にヘラ削りしたと思われる胎土中の砂粒の動きが観察される。ヘラの削り幅は明らかでない。

器高23.4cm・口径16.1cm・胴部の最大径20.6cmを測る。

大見観音崎石棺群「L」字状溝の出土遺物（第17図）

1. 土師器壺 第15図中のNo.6に出土地点を示す。溝の中につぶれた状態で出土した。出土状態は、特に埋納した状態とは思われなかった。この壺と下記に示す壺とが同一地点より発掘されている。

器面は内外面ともにひどく荒れている。外面には所々にごくわずかハケによる調整痕が残る。内面の調整痕の観察は不可能に近い。復元した胴部の形は球状に近い形態を示すと推定される。口縁部・底部と胴部の半分を欠失しており、よくよく観察しないと天地を見分けかねる状態で残存する。

胎土は良好であり、ほとんど砂粒を含まない。復元した胴部の最大径40cmを測る。

2. 土師器壺 上記1と同一地点より出土し、両者を一括して取り上げた。

内外面ともに器面が荒れている。外面の焼成良好な部分にハケによる調整の痕が残る。内面の上方（肩部付近）にもハケによる調整痕が一部残る。胴部より底部にかけてヘラ削りによる調整がなされていると思われるが器表が荒れていて不明である。

胎土中に白色の造岩鉱物を含む。花崗岩質の岩石が風化してできた粘土を素材にして製作されたものとも考えられる。

口縁部および底部を欠失し、全体の約半を残すのみである。復元した形状はやや胴部が長くなるようである。復元した胴部の最大径49.2cm、器厚1cmを測る。

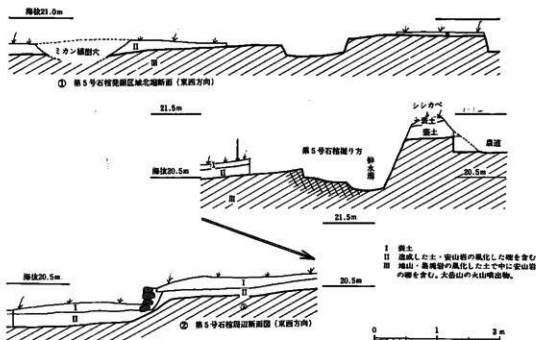
3. 大見観音崎の土層

第18図は、第4号石棺近隣すなわち相摸の土俵があったと言われている付近一帯の土層観察図である。

第18図①は、この発掘区域の東端に当たる部分に、南北にトレンチを設定して観察した断面図である。落ち込みの部分は、観音堂の境内を通過してこの峠を越えるための道の断面と思われる。おそらく、相摸の土俵を造るために、道を現在の位置に移動したのではなかろうか。

第18図②は、農道の方から「L」字状溝の断面を観察した状態である。図のI層には、カーボンを多く含む。I層の土が「L」字状の溝の中に流れ込んだ可能性がある。「L」字状の溝は、第II層を切ってつくられている。

第18図③は、土俵のあった部分を東西に切った状態の図である。10cmほどの表土の下は地山であり、何の遺構も見いだせなかった。



第19図 大見観音崎第5号石棺周辺の土層断面図

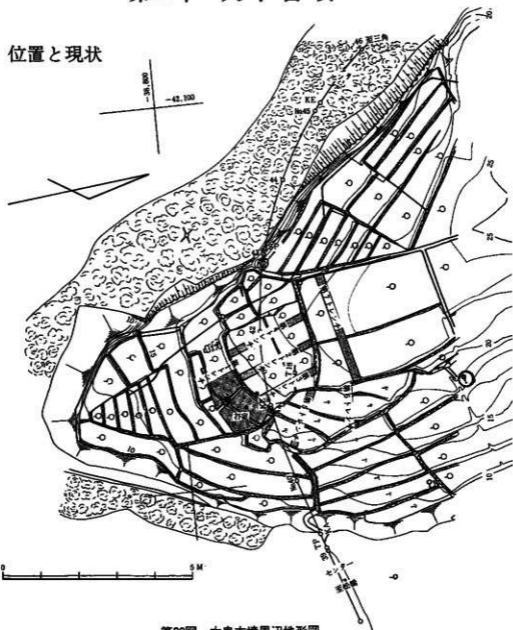
第18図④は、第4号石棺の主軸に対して直角方向にあぜを残して発掘したときのあぜの土層観察図である。上記③と直交する方向に土層を観察したが、第4号石棺以外に何等遺構は検出されなかった。第4号石棺に肩溝があったかどうか不明である。

第19図は、第5号石棺の存在する畑の土層断面図である。この畑は、人力で開墾されているため、場所によって深耕されている所とそうでない所がある。第I層は耕作土である。第II層は深耕によって地山の土(第III層)をくだいたり、移動させたりした土と思われる。ただ、普通に耕すとき、第II層には手が加わらないために、第I層とは区別できる。

シシカベは、自然の地形の高い部分や畑の境界部を削り出し、その上に盛土をして構築したと思われる。年代は不明であるが、畑の起源と同じと考えられる。排水溝も畑を開墾した時、掘られたものと推定される。

第三章 大串古墳

1. 位置と現状

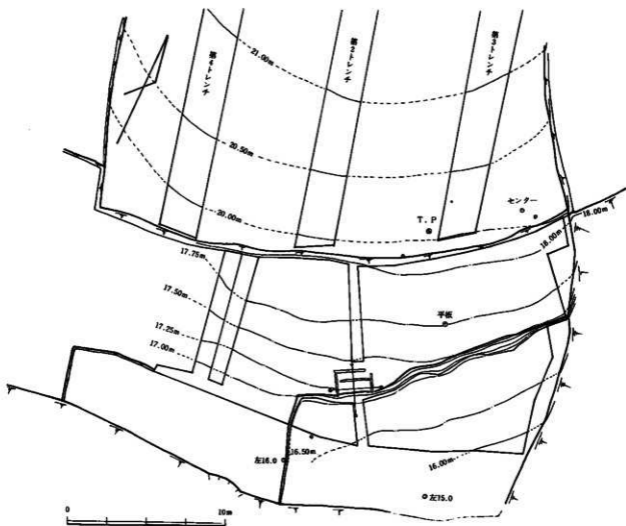


第20図 大串古墳周辺地形図

不知火町大字大見と三角町大字大口の間に存在する四つの岬がある。それ等の内、東から二番目すなわち大見観音崎の西側の岬の先端近くに当古墳は存在する。

観音崎とこの岬との間の湾入はさほど深くなく、自然の海岸線が残されている。両岬の尾根の間の谷部は比較的に平坦であり、自然地形を残した状態で開墾されている。

この岬の基部は海拔25m、縁部は海拔8mを測り、その先は切り立った海蝕崖となっている。



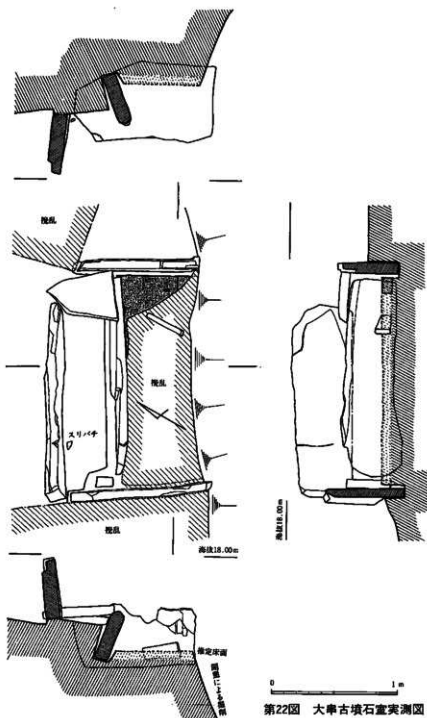
第21図 大串古墳石室周辺地形図（等高線は表土を排除後の面に引く）

石室が存在する附近は、海拔18m前後である。

周辺部はミカン園となっている。ミカン園となる以前は、ブドウ園であったと言う。それ以前にはサトウキビが栽培されていたと言う。この岬はミカン園化する時も人力で行なわれている。

石室の上には、畑から出る小さな礫をすてて、小さな石塚となっていた。礫の間から砂岩の板状の石材が見えかくれていたため、従来は大型の箱式石棺と見なされていた。しかし、発掘したところ、そうでないことが明らかとなった。

ところで、石室の北北東60m付近に石棺らしい物が埋まっているとの話を聞いた。岬の東側斜面であり、大見観音崎と対峙する位置であり、その可能性は充分あるが、存否については確認できなかった。



2. 石室

石室の現状は先に述べたように、露出し、石塚となっていた。石室の用材は、一度撤去しようとしたが、取り上げることができなかったとのことである。石室内には、ブドウの根が残り、攪乱が激しかったので、石室の一部にブドウを植付けていたと思われる。

石室の周囲は人力によって開墾がなされている。表土を排除したが、周溝は検出することができなかった。周溝を持たなかったと思われる。

残存する石室の用材の内、奥壁1枚・東側々壁1枚・西側々壁1枚・仕切り石1枚（奥の屍床）が元の位置を保っている。東側の屍床の仕切り石と思われるものが1点あるが、掘り方もなくなるまで、攪乱を受けて、移動している。いずれの石材も黄褐色の風化を受けやすい砂岩である。

奥壁の幅1.5m・高さ0.48m・厚さ12cmを測る。東側々壁の幅0.95m・高さ0.35m・厚さ9cmを測る。西側々壁は幅1.13m・高さ0.60m・厚さ7cmを測る。仕切り石は幅1.53m・高さ0.47m・厚さ11cmを測る。石材は天草砥石（砂岩）である。

主軸の方向は、ほぼ南南東である。床面は東側々壁ぎわにほんの一部残る。他はブドウの植付けによってこわされている。床面には大豆の大きさの小礫をうすくひいている。

奥の屍床は他の面より7cmほど高く、奥へ行くほど高くなるように傾斜している。広さは、幅1.72m・奥行0.36mを測る。

東側々壁ぎわにも屍床があったと推定されるが、石材が移動しているので、断定を避けたい。石室の残存する大きさは、幅（広い所で）1.72m・奥行1.15mを測る。南側半分が開墾により、完全に削り取られている。

石室の形を推定すると、ほぼ方形の横穴式石室と思われる。屍床の形は「L」字状または「コ」の字状とも考えられるが、手がかりがない。

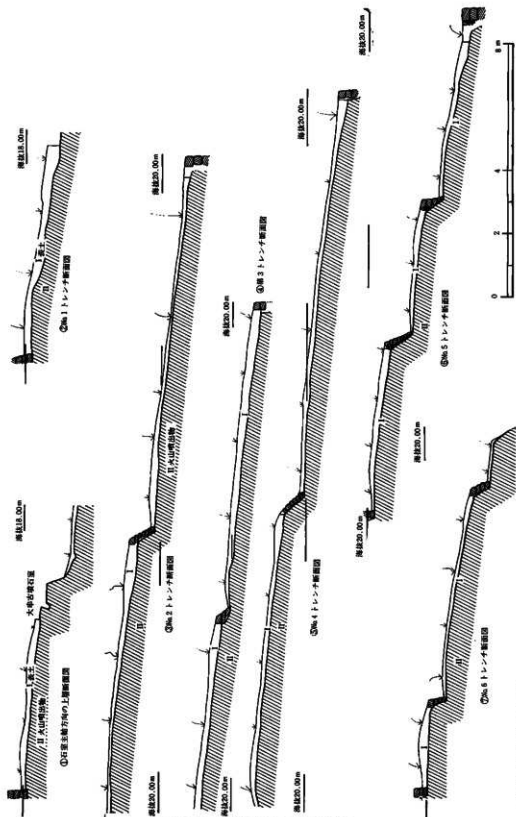
現存する石材は石障と思われる。石障の外に、石室の壁及び天井を角礫の大きいものを積み上げて構築していたと推定される。しかし、それ等の石材は、ことごとく抜き取られて、ミカン園の石垣に転用されたと推定される。奥壁の石材の掘り方が残っていなかったことから、このことは裏付けられる。石室を構築した時の地山の面はもっと高く、石室の床面は元の地山面を掘り下げた状態で造られていたと推定される。

以上のような状態から石室形態を分類すると、乙益重隆氏が言われている、肥後型の屍床を持つ、石障系石室墳に入ると考えられる。

この石室の類似の例としては、小田良古墳がある。小田良古墳は三角半島北岸の三角町に存在する装飾古墳である。昭和53年9月発掘調査が実施されている。大串古墳からは時代のきめてなる遺物が検出されていない。しかし、石室の形が小田良古墳に類似し、小田良古墳の石室の作りより粗雑な点を考慮すると、小田良古墳より後の時代に比定されるであろう。

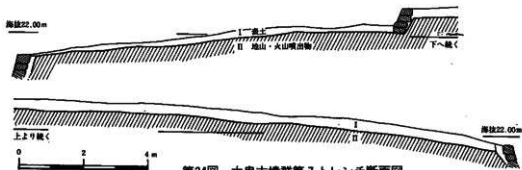
3. 古墳周辺の土層

石室の存在する畑はミカン園である。この畑の上段（北側）は雑地であり、耕作を休んでいる。それより北側は全て、ミカン園である。それ等の畑地に、7本のトレンチを設定して、土



第23図 大串古墳トレンチ断面図

図1層：灰土 第2層：水山崎治物



第24図 大串古墳群第7トレンチ断面図

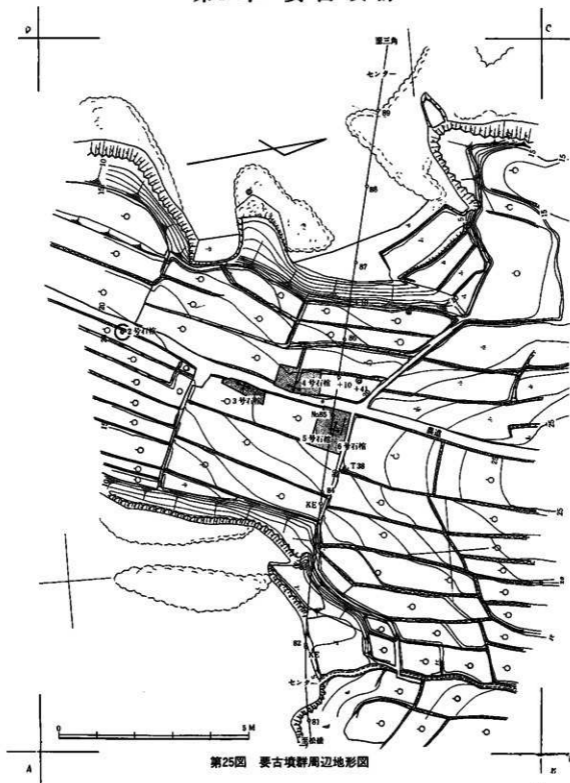
層の観察及び他の古墳や石棺の存否について、確認作業を行なった。

第23・24図に各トレンチの土層断面図を示す。図に示すように、厚さ10～30cmの表土の下は地山である。地山には、安山岩の礫が含まれる。一般には集塊岩と呼ばれるもので、大岳山の火山噴出物であり、凝灰岩の一種と思われる。

この一帯は、ミカン園となる以前に、麦・サツマイモ・サトウキビ・ブドウ等が栽培されていたと言う。ミカン園になる時点でも、徐々に果樹園化したためであろうか。ブルドーザーによる削平はなされていない。そのため、他の地区より、自然の地形が良く残っている。

石室周辺は注意して発掘を行なった。しかし、他の場所と同様によく耕作されていて、周溝の存在を裏付ける何ものも検出できなかった。残存している石室の用材（石障）の内、奥壁の下部よりも、耕作が深く行なわれている。このことから、石室が地山面を掘って築かれていたと考えると、その掘り方がなくなるまで、開墾によって削平されたと言えるであろう。そのように考えると、石障の外に築かれた石室の壁の用材は全て、前節で述べたように取り除かれたと推定されるであろう。

第IV章 要古墳群



第25図 要古墳群周辺地形図

1. 位置と現状

三角町大字大口の集落の東側に突出した岬が要の岬である。この岬の脊梁部に要古墳群が分布する。ほとんど全ての地域がミカン園となっている。このミカン園の間に6基の箱式石棺が分布した。道路敷地内にあったのは、第3～第6号石棺である。

石棺の分布について、聞き取り調査を実施したところ、調査地の近くに1～2基の石棺が存在したもようである。

この岬の西側に大口干拓が広がる。この干拓は2回行なわれたと推定され、堤防が2つ残る。現存の堤防は、昭和2年の高潮の被害を強く受けた。その改修のための採土をこの岬の西側で行なったと伝える。採土地跡と思われる所は、大きく土がえぐり取られている。この部分から石棺が出土したとのことであり、その石材で石塚をつくり、祀っているとのことである。石塚へ行く道は足場が悪く確認はできなかった。出土した石棺の数については不明である。工事を急がねばならなかった干拓堤防の改修作業の時、石塚を作ったと言うことから、石棺が多数出土したかまたは人骨の出土が推定される。

岬の縁部は海蝕崖である。調査地一帯は、海拔18～22mを測り、馬の背状になっている。

2. 遺構及び遺物

(1) 第1号石棺

要古墳群の中で一番南端に位置する。農道から東へ10mほど入った所で、南へ50mほど行くと海である。現状は、ミカンの木の根もとに棺材の一部が見えるのみである。石材は砂岩である。路線外につき未調査である。

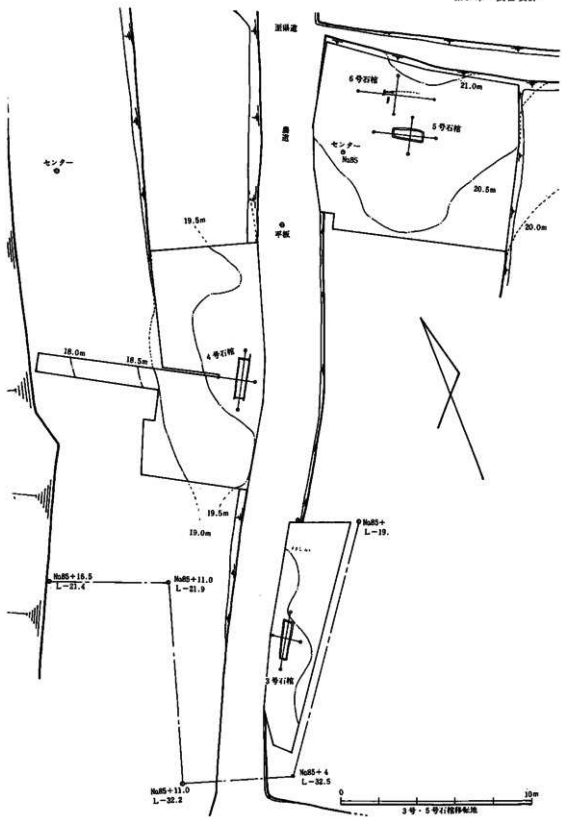
(2) 第2号石棺

第3号石棺から南へ35m行った農道の東側わきに存在する。現状は、ミカン園の中の石塚のようにになっている。石材は安山岩である。石棺の一部は農道建設工事によってこわされているようにも見えるが、保存状態は良さそうだ。

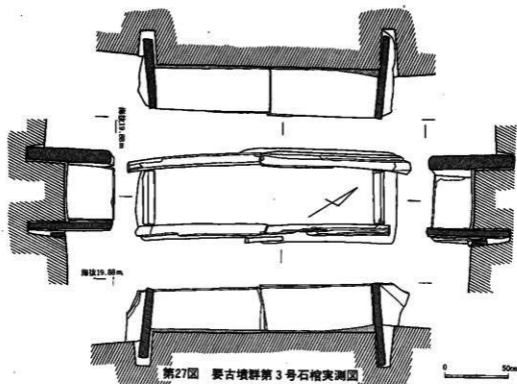
(3) 第3号石棺 (第27図)

本石棺は、要古墳群調査対象区域の一番南側に位置し、主軸をN-31.5°-Eにとり埋置されている。保存状態は良好であるが、石棺蓋石はすでに動かされていて、一部は欠失している。また石棺周辺の地山もミカン園造成時に機械により約0.3～0.4m程削平されており、墓壇は床面と同レベルぐらいの高さまでしか遺存していない。

石棺は、内法で長さ1.75m・幅0.46m・深さ0.35mを測る。棺材はすべて板状砂岩を使用している。側石は各2枚ずつ並べて立て、東側側石中央附近の外側には1枚の板状の砂岩を立て、



第26図 要古墳群発掘調査区域図 (等高線は表土剥除後の面)



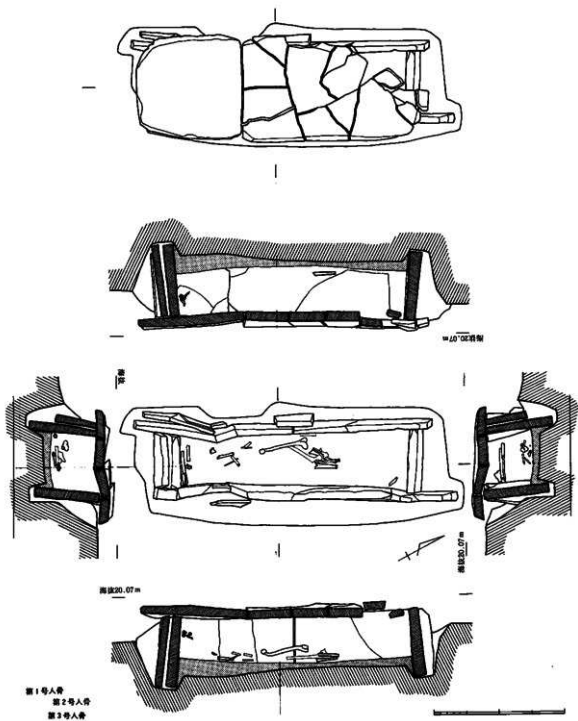
側石の支えを行なっている。床面は礎床で、径1cm程の自然礫を約2cm程の厚さに敷き詰め、全面に赤色顔料を塗布している。北側床面には歯が数本検出されており、被葬者は頭部を北に向け埋葬されていたと推察されるが、埋葬状態及び被葬者数等は不明である。副葬品は、全く検出されなかった。蓋石は、調査前に動かされており蓋石間のすきまに粘土等で目張りをしていたか否かは不明であるが、板状の砂岩を3ないしは4枚並べて架けていたと推察される。

墓壇は、安山岩風化土を掘り込んでおり長辺2.07m、短辺0.74mの隅丸長方形を呈し、墓壇と石材の間には粘土のかわりに黄色土を詰めている。

(4) 第4号石棺 (第28図)

調査を行なった第3号石棺・第5号石棺のほぼ中間に位置する。主軸をN-28.5°-Eにとり第3号石棺と平行、第5号石棺とはほぼ直交する方向に埋置されている。今回調査を行なった4基の石棺の中では最も保存状態が良好で、埋葬当時の状態で調査することができた。

石棺は、内法で長さ1.76m、幅0.44m、深さ0.35mを測り、石材は両側に各2枚ずつ両小口に各1枚ずつの板状の凝灰岩を使用し、また南側小口及び両側石の継ぎ目部分などに砂岩の板石を立て3号石棺同様棺材の支えを行なっている。床面は礎床で、自然礫を厚さ5~13cm程敷き、石棺内面及び床面には赤色顔料を塗布している。棺内には、計3体の人骨が追葬のかたちで遺存した。南側小口付近に集骨された状態で検出した1号人骨が1番古く、女性で頭位を北

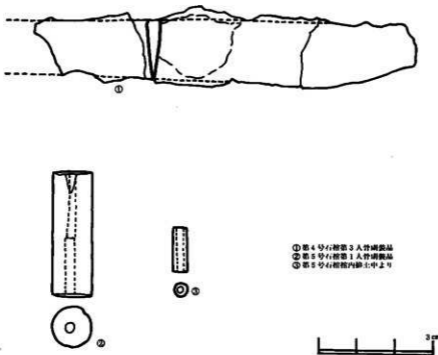


第28図 要古墳群第4号石棺実測図

に向け伸展葬で埋葬された2号人骨、頭位を南に向け2号人骨の上に同じく伸展葬で埋葬されていた3号人骨と新しくなると考えられる。

副葬品は、北側小口石付近より切先を南側に、刃部を内側にした刀子を1本検出したがどの人骨に伴う副葬品かは不明である。

蓋石は、北側部分を少し欠いてはいるがほぼ完全に残存しており、2枚の板状に加工した凝灰岩を使用し並べて架けている。粘土等による目張りは認められなかった。



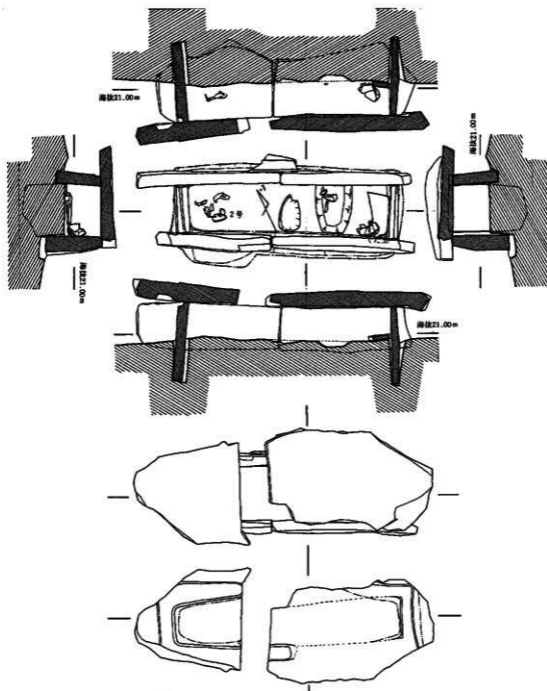
第29図 第4・5号石棺出土遺物

墓壇は、他の石棺と同じく安山岩風化土を掘り込み、長辺2.43m、短辺0.94mの隅丸長方形を程し、北側短辺部及び東側長辺部には、石棺を埋める部分でさらにもう一段の掘り方を設け、二段の墓壇を有している。墓壇と石材の間には、粘土のかわりに黄色土を詰めている。

周溝については、何等確認できなかった。

石棺内出土遺物 (第29図①)

刀子 切先部を欠失しており、現存長10.5cm、刃部幅1.5cm、鋒厚0.4cm、茎は2.5cmを測る。背はほぼ直線で、茎と身の境には特別の段は有していない。



第30図 要古墳群第5号石棺実測図

(5) 第5号石棺 (第30図)

ミカン園の間に、側壁の最下部が見えるまで土が削り取られて、露出していた。蓋石は2枚、側壁はそれぞれ2枚、小口は各1枚露出していた。側壁のつなぎ目には1枚の石をあててあるのが発掘前から観察された。石材は全て黄褐色の砂岩である。

蓋石は長さ0.85m・幅0.8m・厚さ15cmと長さ1.32m・幅0.75m・厚さ15cmを測る。内面には、棺身の幅に合わせた溝が掘られている。蓋が棺身に合うように調整するため、内面を敲打したあとが観察される。

北側側石は長さ1.15m・幅0.32m・厚さ10cmと長さ1.05m・幅0.32m・厚さ10cmの砂岩からなる。2枚の石材のつなぎ目にはうすい板状の砂岩があてられている。蓋石と接する面は調整されている。

南側側石は長さ0.93m・幅0.63m・厚さ13cmと長さ1.15m・幅0.58m・厚さ12cmを測る。蓋石と接する面は北側側石と同様に調整されている。

北側の小口石は幅0.36m・高さ0.62m・厚さ8cm、南側の小口石は幅0.42m・高さ0.61m・厚さ7cmを測る。蓋石と接する面は側壁同様に調整してある。

棺身の内法は、長さ1.65m・幅0.42~0.39mを測る。幅は東方が広く、西方が狭い。主軸の方向はほぼ東南(N-64°-W)である。

床面は、ほぼ平であるが、二ヶ所に盗掘による傷が残る。床は地山を整形して作られている。床面上に板状の35cm×15cm×4cmの枕石が、東すみに置かれている。

内面には赤色顔料が塗布されている。特に床面には厚く赤色顔料が広がっている。

東側の枕石上に頭骨が1体分(1号人骨)と西側に頭骨が1体分(2号人骨)検出された。埋葬の様子からして、枕石に頭部を置いている人骨(1号人骨)が先に埋められたと推定される。頭骨を除いて両者ともほとんど骨格は出土しなかった。盗掘による攪乱によって、消失したと推定される。

1号人骨の後頭部(床面直上)より、管玉(第29図②)が出土した。それ以外、何も遺物は出土しなかった。

掘り方は、石材に合わせて掘っている。内面の方に5cm以内のゆとりがある。

周溝は発掘によっても確認できなかった。ブルドーザーによる削平がなされているためである。故に周溝の存否については、断定する要素は何も見い出せない。

石棺内出土遺物(第29図)

2は、碧玉製管玉で色調は青白色を呈している。長さ32.3mm、径10.7mm、孔径2.4mmを測る。穴は両側より穿孔を行なっている。出土位置は、1号人骨頭骨下で石枕近くより出土している。

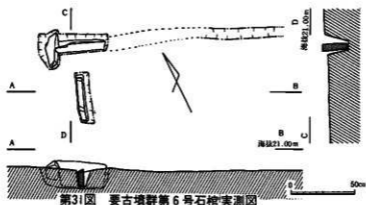
3は、碧玉製管玉で風化しているため色調は白緑色を呈している。長さ11.5mm、径3.6mm、孔径1.6mmを測り、穿孔は片側から行なっている。棺内排土をフルイにかけて検出したものであり、検出状態および位置は不明である。

(6) 第6号石棺(第31図)

ブルドーザーにより、石棺上部および床まで削り取られている。遺構は、ほとんどこわれており、掘り方の深い部分に石材が残る。耕作土中に赤色顔料のついた小礫が多数まじることから、礫床と推定される。

棺材は砂岩であり、一部に頁岩を使用していた。

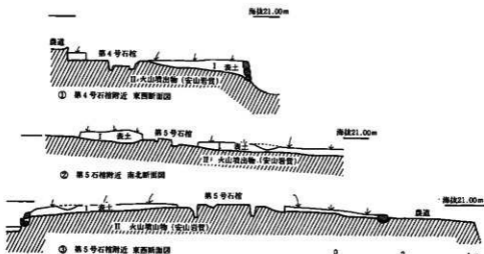
主軸の方向は第5号石棺とほぼ平行である。両者の石棺の間隔は1.5mは離れていなかったと推定される。



第31図 要古墳群第6号石棺実測図

3. 要古墳群の土層 (第32図)

要古墳群の石棺群が分布する一帯は、ミカン園である。ミカン園となる以前は、先にも述べたように、麦・サツマイモ・サトウキビ等が栽培されていたと聞く。特に、サトウキビは、この地方の特産品であり、多く栽培されていたと思われる。戦後の混乱期から昭和30年代初頭においては、「郡浦の砂糖（黒砂糖）」と言われて、重宝されたものである。



第32図 要古墳群第4・5号石棺周辺土層図

昭和30年代末から昭和40年代初頭にかけてのミカン園造成ブームの波に乗り、この一帯もミカン園化したと思われる。

ミカン園内の農道改修工事の節、第3・4号石棺は墓地であるとの考えから、地権者・農道利用者の意見に従って、保存された。

第4号石棺の存在する畑地は、石棺に接する部分を除いて、ブルドーザーによる削平が行なわれている。斜面であるため、西側の崖ぎわは表土が深く（1m程度）、東側は浅くなっている。5号石棺の存在する畑は、0.7mほどブルドーザーにより削平したと言う。現在の畑の耕作土（表土）は、第5号石棺近くでは、0.3mほどである。同一の畑に存在する第3号石棺周辺の耕作土も、0.5m以上も天地がえしをされている。以上のことと、第5号石棺の露出状態から、第5号石棺周辺の土は、0.4m以上移動していると考えられる。

第5号石棺の存在する畑の北側の畑にトレンチを設けて、天地がえしの状態を観察した。これにより1m以上も天地がえしをうけていることが、明らかとなった。

基盤となっている土には、安山岩の風化した礫を含む。大岳山より噴出した岩石（集塊岩）が風化したものと考えられる。

上記のことから、第3・4・5号石棺とも、地表に蓋石がやっと見える状態に、埋められていたと推定される。そのように考えると、蓋をおおう土が当然必要になるであろう。蓋をおおう土がかぶせられるとするならば、外観的には、小さな塚が存在したことになるであろう。周溝の存在は、土層の断面観察によっても、確認できなかった。

第V章 総論

1. 大見観音崎石棺群の年代について

大見観音崎石棺群に所属する石棺の正確な基数は、不明である。今回の調査によって、明らかになった石棺の数は10基であり、その他に、「L」字状の溝が1基検出された。

今回調査した石棺は、第4・5・6・10・11号である。第4号石棺からは、刀子が1本出土した。この石棺の石材は砂岩である。埋葬人骨については不明である。石材は異なるが、要古墳群第4号石棺からも、刀子が1本出土している。両者とも、組合せ式石棺であり、類似の刀子を1本のみ埋納するという様子から、葬送の形が類似している。

第5号石棺は、幅にたいして、長さが短い石棺である。第6・11号石棺の形状は、石材は異なるが、第4号石棺に類似する。第14図に示した鋤先は第11号石棺に副葬されていた可能性がある。第10号石棺については、存在は明らかなが、形状は不明である。

道路敷地外に存在する第1号石棺については、「不知火町史」以外に、高木恭二氏の論考がある。同氏は、『肥後南部の石棺資料(一)』において、第1号石棺の蓋石の取手について、「この種の突起は、先の国越古墳閉塞石に似たつくりであり、地域的にも共通性が何われよう」と述べておられる。この一文からも解かるように、この石棺は、国越古墳が構築された年代と相前後する年代の所産と推定できるであろう。国越古墳の年代について、高木氏は上記の文中に「時期的に6世紀前半～中葉頃に比定できよう」と述べておられる。

「L」字状溝から出土した土師器は、小型丸底壺・甕・壺・高坏である。これ等の土師器の年代について、野田拓治氏(文化課学芸員)の御教示をうけた。

小型丸底壺は、胴部径に対して口径が大きい。高坏は坏部が深く、また、柱状部の形態に二形式がある。甕の口縁部は、内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部をつまみ上げており、胴部の形が倒卵形を呈する。また、これ等の土器に類似する遺物を出土した例としては、熊本県下益城郡城南町沈目遺跡と塚原古墳群がある。土師器の分類から見ると、沈目の第Ⅱ期・塚原の第Ⅰ期が年代的に対応すると考えられる。「L」字状溝から出土した土師器は布留式土器であり、4世紀末に比定される。

「L」字状溝は、方形にめぐる可能性が考えられることから、方形周溝墓の一部と推定される。この遺溝は、他の石棺より先行するものと考えられる。そのように考えると、「L」字状溝は、土師器の年代から、4世紀末に、石棺群は、それよりおくれ、5世紀代以降に比定されるであろう。

以上、述べたことより推論して、大見観音崎石棺群は、4世紀末から6世紀前半にかけての所産であろう。しかし、各石棺の時代差については、現状では不明である。

2. 大串古墳の年代について

第三章に述べたように、残存していたのは、石室の石障の一部であった。平面のプランは、ほぼ方形と推測されるが、南側半分を欠失しているため、実態は不明である。

屍床は奥の屍床のみ残存していた。床面の擾乱中に仕切り石の一部が残存していたので、屍床の形は「コ」の字または「L」字状になると思われる。

石室は半地下式となり、石障の上面近くの高さより、大きな角礫をドーム状に積み上げて構築されたと推測される。石室の掘り方が開墾によって削り取られており、石障を残すのみであり、推定の範囲を出ない。

三角半島の北岸に存在する「小田良古墳」の例を参考にすると、上記のような石室の形態を持つ古墳が考えられる。このような石室を持つ古墳としては、三角町には「清盛山古墳」がある。

石室を構築したと思われる石材は、ミカン園の石垣に使用されている人の頭より大きな角礫（安山岩）の一部がそれだと考えられる。これ等の石垣の中には、割石小口積に使用される板状に節理が発達した安山岩は見受けなかった。

小田良古墳の年代について、『小田良古墳』の中で、隈昭志氏は「大戸鼻北古墳に類似する石室を有する円墳である可能性が強く、石室の構造などから推して、6世紀前半に比定できるものと考えられる」と述べておられる。ところで、乙益重隆氏は、『石障系石室古墳の成立』の中で、小田良古墳は「装飾古墳としては初期様式に属し、おそらく5世紀代の所産であろう」と述べておられる。上記のことから、両氏の同古墳に対する年代観については、少し差異が認められる。

大串古墳は、先にも述べたように、石室の形態が小田良古墳に類似した、半地下式の肥後型の石障系石室墳と見なされる。大串古墳には装飾はなく、また、年代の決め手になる遺物は出土していない。しかし、小田良古墳と石室の形態が類似し、石障の作り方が粗雑であることから、構築年代は小田良古墳より下ると考えられる。小田良古墳の構築年代を5世紀末から6世紀前半に比定するならば、大串古墳は6世紀代に比定されるであろう。

3. 要古墳群の年代について

要古墳群の箱式石棺の確認できた基数は6基であった。ただ、聞き取り調査によると、6基以上存在したと思われる。

昭和31年5月から昭和32年3月にかけて調査された平松箱式石棺群の調査報告の中で、坂本經堯氏は要古墳群について、「不知火海にのぞむ雄大な岬で八代海沿岸を見晴らす景勝の地である。中央の平坦な畑地に箱式石棺5基と礫構一基が露出している。蓋石と側壁に、はめ込み

溝を刺し丹を塗った精巧なものがある。また干拓堤防の基点となった支丘にも石棺があるという」と紹介されている。

第3号石棺からは、ヒトの白歯（性別不明・熟年）が出土した。第4号石棺からは、3体の人骨（男性1体・女性2体・いずれも成人）と刀子1本が出土した。第5号石棺からは、2体の人骨（女性・成人）と碧玉製管玉2個（大型・小型）が出土した。人骨の詳細については、付論（北條暉幸先生著）を参照されたい。

第3号石棺の露出状態および第4号石棺の掘り方から、石棺の旧状を推定すると、蓋が旧地表面上にやっと見える程度に埋納されていたと思われる。箱式石棺に埋葬される人骨は、複数である例がきわめて多い。このことは、佐藤伸二氏の『熊本県下の箱式石棺墓』を見ると、よく理解できる。箱式石棺に追葬するからには、棺の埋納されている位置を明示しておく必要がある。先に紹介した『平松箱式石棺群』には、円墳の主体部が箱式石棺であることが述べられている。このことは、箱式石棺は墳丘を持つと考える一つの手がかりとなるであろう。要古墳群においては墳丘の存在について確認できなかった。しかし、石棺が上に述べた状態で埋納されたと仮定して、掘り方より排出した土をそのまま石棺上に盛り上げたとすると、高さ0.6 mのマウンドができるであろう。ところで、周溝の存在については、全く明らかでない。

石材の面から見ると第4号石棺と大見観音崎石棺群第1号石棺とは凝灰岩を使用している点が類似する。

遺物の面から見ると、第4号石棺と大見観音崎第4号石棺ともに刀子を1本出土した。両者の間には、石材（砂岩と凝灰岩）や床の造り方（礎床・床の一部に板石を敷く）に差異がある。第5号石棺から先に示すように碧玉製の管玉が出土した。この遺物から年代は、5世紀又は6世紀の所産と推定されるであろう。

要古墳群の箱式石棺は棺身の幅と長さの比が1対4になるのに対して、大見観音崎石棺群の石棺の幅と長さの比は1対1.3から1対4.7と種々様々である。このことは、要古墳群の方が後者より均質であり、時間的な幅が少ないと考えられる。

第3表に、要古墳群および大見観音崎石棺群の石棺の長さと同幅を中国各時代の尺度に換算して示した。中国の1尺の長さについては、『古墳の発掘』の86頁を参照した。同書の中で、森浩一氏は、「高麗尺というのは、中国北朝の東魏（534～550年）の時代に定まったもので、これが高句麗に採用され、日本へ伝来したのは早くとも6世紀中ごろかと推定される」と述べておられる。このことに注目して、第3表の作成を試みた。

第3表の換算表から見ると、要古墳群の箱式石棺は宋（西暦420～479年）または梁（西暦502～557年）の1尺を基準とした場合、長さ7尺・幅1尺8寸が標準のサイズとなるであろう。大見観音崎石棺群の換算結果について、完全に発掘できなかったり、欠失している部分の大きさを推定したところを除いて考えたい。石棺の幅を中心に考えてみると、宋の尺度が一

番対応していると考えられる。

要古墳群の年代を推定しようと試みたが、現状では刀子と碧玉製の管玉以外に資料を持ち合わせていない。第3表の尺度の問題からみた場合、高麗尺が古墳築造に採用される以前の所産と、要古墳群を見なしたい。つまり、5世紀後半から6世紀前半に比定され得るであろう。このことは、遺物の上からも、類似の意見が求められるであろう。

4. おわりに

以上、大見観音崎石棺群、大申古墳・要古墳群の年代を少量の遺物と少数の類例から推論を試みた。今後、三角半島南岸の他の遺跡と対比し、年代的位置付けを行ない、比定される時間の幅を狭くする必要がある。

本報告文を閉じるに当たり、調査および報告文執筆終了まで、多くの方々の御援助がありました。末尾ながら、関係者各位の御好意に対し、厚く御礼申し上げます。

- 註. 高木恭二 「肥後南部の石棺資料(一)」『宇土市史研究 第二号』
宇土市史研究会・宇土市教育委員会 昭和56年3月 熊本
- 佐藤伸二 「熊本県下の箱式石棺墓」『日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨』
昭和51年 熊本
- 隈 昭志 「小田良古墳」三角町教育委員会 昭和54年3月 熊本
- 乙益重隆 「石障系石室古墳の成立」『國學院大學 大學院紀要 第11輯』國學院大学大学院
昭和54年度 東京
- 坂本経典 「平松石棺群」 三角町 昭和32年6月 熊本
- 森 浩一 「古墳の発掘」中央公論社 昭和40年4月 東京
- 不知火町史編さん委員会 「不知火町史」 宇土郡不知火町 昭和47年3月 熊本
- 宇土郡役所 「宇土郡誌」大正10年 名著出版 昭和48年6月 東京

第 3 表 要古墳群・大見観音峰石棺群の石棺の尺換算表

(中国各時代の 1 尺の長さは「古墳の発掘」を参照した。)

石棺名	中国各時代の 1 尺の長さ		威 国	後 漢 1 尺=0.235m 建初 6 年(81) 尺	魏 1 尺=0.243m 正始元年(240) 等 尺	晋 1 尺=0.24m 永寧 2 年(302) 骨 尺	宋 1 尺=0.247m	梁 1 尺=0.240m	東 魏 1 尺=0.248m 高 麗 尺	長さとの比
	長さ	幅								
要古墳群	第 3 号石棺	長さ 1.75m	7.61尺	7.45尺	7.20尺	7.29尺	7.09尺	7.03尺	5.03尺	3.8 対
	第 4 号石棺	長さ 0.46m	2.00	1.96	1.89	1.92	1.86	1.85	1.32	1
大見観音峰	第 4 号石棺	長さ 1.76m	7.65	7.49	7.24	7.33	7.13	7.07	5.06	4.0 対
	第 5 号石棺	長さ 0.44m	1.91	1.87	1.81	1.83	1.78	1.77	1.26	1
大見観音峰	第 4 号石棺	長さ 1.65m	7.17	7.02	6.79	6.88	6.68	6.63	4.74	4.0 対
	第 5 号石棺	長さ 0.41m	1.78	1.74	1.69	1.71	1.66	1.65	1.18	1
大見観音峰	第 1 号石棺	長さ 1.83m	7.96	7.79	7.53	7.63	7.41	7.35	5.26	2.5 対
	第 2 号石棺	長さ 0.73m	3.17	3.11	3.00	3.04	2.96	2.93	2.10	1
大見観音峰	第 4 号石棺	長さ(推定) 約 1.8m	7.83	7.66	7.41	7.50	7.29	7.23	5.17	4.4 対
	第 5 号石棺	長さ 0.41m	1.78	1.74	1.69	1.71	1.66	1.65	1.18	1
大見観音峰	第 5 号石棺	長さ(推定) 約 1 m	4.35	4.26	4.12	4.17	4.05	4.02	2.87	1.3 対
	第 6 号石棺	長さ 0.8m	3.48	3.40	3.29	3.33	3.24	3.21	2.30	1
大見観音峰	第 6 号石棺	長さ 2.35m	10.22	10.00	9.67	9.79	9.51	9.44	6.75	4.7 対
	第 7 号石棺	長さ 0.5m	2.17	2.13	2.06	2.08	2.02	2.01	1.44	1
大見観音峰	第 1 号石棺	長さ 1.95m	8.48	8.30	8.02	8.13	7.89	7.83	5.60	4.2 対
	第 2 号石棺	長さ 0.46m	2.00	1.96	1.89	1.92	1.86	1.85	1.32	1

附 論

要古墳出土の人骨について

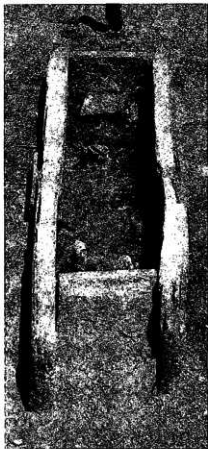
産業医科大学第1解剖学

教授 北條 暉 幸

人骨の保存状態は、全体として不良であった。すなわち、3号石棺から歯だけ、4号、5号各石棺中からは人骨が採取されたが、長管骨たとえば大腿骨、脛骨などは骨端が破損しており、長管骨を用いる身長推定は不能であった。なお、人骨は複数埋葬の場合、個体識別を行って、性、年齢を推定し、その他の特徴についても、あわせて次頁に表示した。



附録1図
要古墳群第4号石棺人骨出土状態

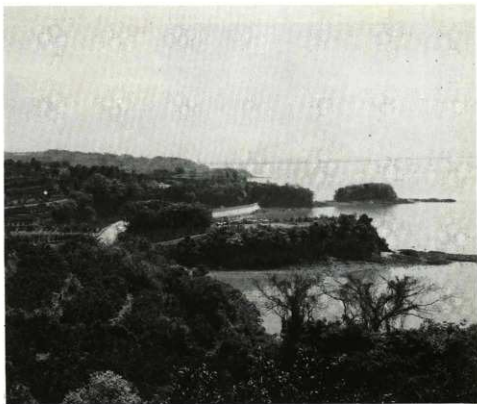


附録2図
要古墳群第5号石棺人骨出土状態

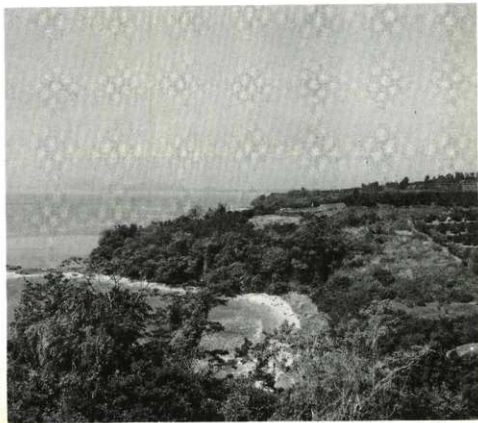
要古墳出土人骨所見一覧

	番号	性別の推定とその理由	年齢の推定とその理由、その他特記事項
第3号石棺	1号 人骨	性別不詳。	熟年。小白歯、大白歯など若干の歯が残存、いずれも咬耗甚しく Broca の3~4。
第4号石棺	1号 人骨	男性。右側乳様突起大。	成人(若い)。上顎残存、全歯萌出、歯の咬耗少ない。左右の大腿骨細くきゃしゃ。身長推定不能。両側面にまとめて集骨してあった。
	2号 人骨	女性。大坐骨切痕大。	成人(年齢不詳)。左右の大腿骨不完全。
	3号 人骨	女性の可能性。 骨格の破片きゃしゃ。	成人(年齢不詳)。脛骨不完全、細くきゃしゃ。赤色塗料が付着。
第5号石棺	1号 人骨	女性の可能性。 長幹骨細長くきゃしゃ。	成人。矢状、人字両縫合開離、冠状縫合は内板閉鎖、外板開離。赤色塗料が付着。頭骨の下に石枕あり。
	2号 人骨	女性。乳様突起小。 左右とも下顎窩狭く深い。	成人。人字縫合内外板ともに開離、矢状縫合内板すでに閉鎖。

注 4号石棺内人骨の埋葬順序は人骨の重なり状態などから、1号、2号、3号の各人骨の順番と推定される。また5号石棺内人骨の埋葬順序は石枕を用いていた1号人骨が先に埋葬されたものと推定される。なお、3号石棺内人骨は1体と推定される。



1. 要古墳群より
大串古墳・大見
観音崎石棺群の
方を望む



2. 大見観音崎石
棺群より大串古
墳・要古墳群の
方を望む



1. 遺跡の南方を望む。第4号石棺発掘中



2. 遺跡の北方を望む 第5・6号石棺発掘中



3. 山路の断面



1. 第1号石棺所在地



2. 第2号石棺所在地



3. 第3号石棺所在地



1. 第4号石棺
蓋石露出状態



2. 同石棺蓋石除去後



3. 同石棺 掘り方



1. 2. 3. 第4号石棺検出過程

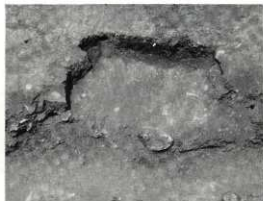


4. 同石棺遺物出土状態



5. 同石棺出土遺物

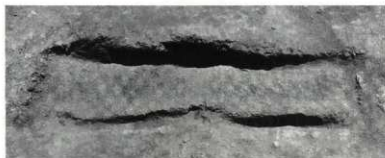




1. 大見観音崎石棺群第5号石棺 検出状態



2. 同石棺群第6号石棺



3. 同石棺群第11号石棺掘り方



4. 同石棺群第11号石棺近くより表採遺物

1. 「L」字状溝検出。発掘前の状態



2. 「L」字状溝と第4号石棺



3. 「L」字状溝の検出状態



4. 「L」字状溝中の壺の出土状態





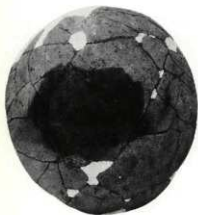
1



2



3



4.(第17図1参照)



6.(第16図5参照)



8.(第16図2参照)



7.(第16図1参照)



9.(第16図3参照)



5.(第17図2参照)

1~3 「L」字状溝中の遺物出土状態。

4・5 壺

6. 甕

7. 小型丸底壺

8~10 高坏



10.(第16図4参照)



1. 石室発掘以前



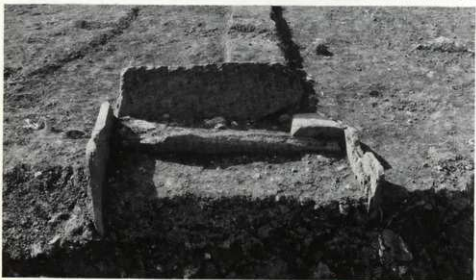
2. 石室露出状態



3. 石室の用材除去後



1. 石室近影



2. 石室、南方より見る。



3. 石室掘り方
南方より見る。



1. 石室遠望



2. 第2トレンチ



3. 第6トレンチ



4. 1に同じ



1. 第3号石棺露出状態



5. 3に同じ



2. 同石棺 検出状態



3. 同石棺 掘り方

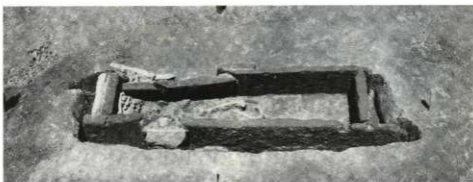
1. 第4号石棺蓋
石露出状態



2. 同石棺蓋石除
去後



3. 同石棺 内
掘状態



4. 同石棺 掘り
方





1. 第4号石棺人骨
検出状態



2. 第1・2号人骨露出状態



4. 同石棺 遺物
出土状態



5. 同石棺内出土
遺物(刀子)



3. 第2・3号人骨露出状態

1. 第5号石棺
露出状態



2. 同石棺 人骨
検出状態



3. 同石棺 人骨
取り上げ後



4. 同石棺 掘り
方





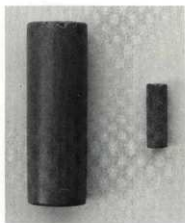
2. 第5号石棺第1号人骨



1. 第5号石棺人骨検出状態



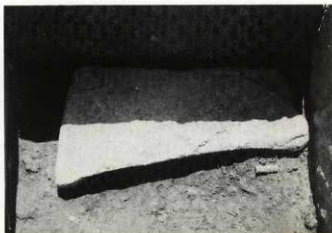
3. 第5号石棺 第2号人骨



4. 第5号石棺出土遺物



6. 第6号石棺検出状態



5. 第5号石棺遺物検出状態

熊本県文化財調査報告 第57集

大見観音崎石棺群・大串古墳・要古墳群

昭和57年 3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 コロニー印刷
〒860 熊本市二本木3丁目12-37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 57 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：大見観音崎石棺群 大串古墳 要古墳群

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日